

インターカルチャー INTERCULTURE

NO. 87

2003年5月号

MAY



■■ 学校法人 千里国際学園 Senri International School Foundation (SISF) ■■

千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) 併設 大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS)

〒562-0032 箕面市小野原西4丁目4番16号 TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055 URL <http://www.senri.ed.jp>

高等部卒業生81名巣立つ
大学等合格状況報告
入学式7カ国後で宣誓
高等部北海道学年旅行
ワールドリーダーズサミット報告



4/4入学式：体育館にて

国際学校として =安全と自由=

大迫弘和
SIS校長

春爛漫。美しき日本の春。
SIS、13度目の春。

◇

春休み中に安全対策のための工事が行われました。生徒たちが学ぶ校舎は堅牢な守りを固めました。「生徒たちを守る」。2001年6月8日、教育に携わる者に突きつけられた重大な課題です。

それは風化させるようなことがあってはならない事件でした。

「あのときパパやママがいないのに、次第に薄れていく意識の中で、綾乃ちゃんは歯をくいしばり色んな光景を小さな心の中で追っていたことでしょう。楽しかったこと、頑張ったこと、もっともったかったことが白い画になって、それも次第に小さくなり、ぼつんと消えたことでしょう。」
(『かくれんぼ』森脇徹さん著より)

私たちは「生徒たちを守る」という課題に、強い意志をもって今後もたちむかっていきます。「生徒たちを守る」、それは教育に携わる者にとって最重要の責務です。

犯罪から、災害から、生徒を守る。そのためにいついかなるときも生徒から目を離してはいけません。管理ということでは決してなく、彼らを守るために。

◇

2001年は6月の池田小の惨劇後の対応に終われる中、"September 11th"がありました。

それから続く国際テロの危機感の中、タイ国を行き先として決定していた2003年3月の11年生(現12年生)学年旅行は行き先の検討を余儀なくされました。生徒・保護者・学年の先生方、みなが苦しみながらも必死に真摯な意見交換を積み重ね、行き先を国内に変更するという結論に至りました。

◇

この春休み中、イラク戦争で退避帰国された方のため緊急の編入考査を行

いました。帰国生徒の受け入れ校としての社会的使命として。

本校ではご子息が戦場にいかれている米人教員もいらっしゃる。

国際学校として、戦争は、私たちのすぐそばにあります。

◇

重症急性呼吸器症候群(SARS)についても国際学校としての対応を迫られました。すでに保護者の皆様にはレターでお知らせしておりますが、予定されていた北京・マニラ・ソウルでのAPACの試合はすべて中止となりました。また、危険地域からの帰国者・来校者には、校内の立ち入りについて出校停止を含めての措置を取っています。

APACの試合を楽しみにしていた生徒たちの心を思うと本当にかわいそうです。タイ国への学年旅行の準備をすすめるを楽しみにしていた生徒たちも同様の思いだったはずですが、自分たちになんの非があるわけでないのに、楽しみに、目標にしていたものを奪われてしまうといった「現実」をなんとか受け入れる力を、少し時間が必要かもしれませんが、つけてもらえればと思っています。もちろん、このような時、生徒たちをみなで支えてあげることが、大切なことはいくつまでもありません。

◇

学園として、とりわけ国際学校として今後も様々な「判断」が迫られることを覚悟しなければならない、そのような時代であると認識します。

"September 11th"の後、「安全か自由か」といった議論がありました。安全のためには自由はある程度制限されなければならない、特にアメリカでは「安全」を取る人々が大半を占めていました。

しかし、そのような二者択一ではなく、このようなときこそ「自由」とは何かを考える機会であるととらえ、



「安全でかつ自由な学校作り」を目指し、知恵を結集していければと願うのです。

天が崩れ落ちないかと心配した杞の国の人のように、心配のあまり、国際学校としての機能を失わないよう十分に注意しつつ、ことは生徒たちの安全にかかわることです、多くの人の意見に耳を傾け、最善の判断を下して参ります。

千里国際学園基本方針

千里国際学園では、自分の行動に責任を持ち、よい人間関係を維持していく能力が、生徒各自に備わっていると信じます。この考えにもとづいて、次のような行動の目安がつくられています。

<5つのリスペクト>

自分を大切にする
他の人を大切にする
学習を大切にする
環境を大切にする
リーダーシップを大切にする

高等部卒業生81名巣立つ

第10期生(Class of 2003)卒業式

高等部第10回卒業式が、3月8日(土)に本学園の体育館にて举行されました。

スライド上映のあとの卒業生の入場。そして、今年の卒業式の中心は卒業証書授与の時の一人一人の生徒による30秒スピーチでした。涙を誘うスピーチあり、笑いを誘うスピーチあり。中には30秒で収まりきらなかったスピーチもあったようですが、全員の生の声での、卒業していくにあたっての偽りないことばはどれもとても印象的でした。そして忘れてはならないのは、全員が卒業証書授与のために通ってくるスロープの事です。卒業生有志たちの手で、卒業式の数週間前から2階の理科教室前で、材木の切断から始まって一から作られた学年のスロープ。卒業式当日の最も輝いていた存在であったと思います。

個性あふれるスピーチと手作りのスロープ。いかにもClass of 2003らしい卒業式でした。81名の卒業生の皆さんおめでとう。これから自分らしさを大切にしたい人生を歩んでください。

(井藤)



2003年度大学等合格状況

進路情報室

2002年度卒業生徒数81名、過年度生4名（合格者数は延べ人数） 2003年4月10日現在判明分

学校名	合格者数		学校名	合格者数	
	現役	卒業		現役	卒業
〈国公立大学〉			聖和大学	1	
大阪大学	1		園田学園女子大学	1	
大阪外国語大学	3		多摩美術大学	1	
岡山大学		1	同志社大学	2	2
京都市立芸術大学	1		東京造形大学	1	
京都工業繊維大学		1	奈良芸術短期大学	1	
神戸市外国語大学	2	1	南山大学	1	
筑波大学	2		兵庫大学	1	
長崎大学	1		仏教大学	1	
北海道大学	1		ブール学院大学	1	
〈私立大学・短期大学〉			武庫川女子大学	1	
青山学院大学	1	1	武蔵野美術大学	1	
大谷大学	1		明治学院大学	1	
大阪音楽大学	1		立命館大学	8	2
大阪樟蔭女子大学	1		立命館アジア太平洋大学	1	
大阪体育大学	1		流通大学	1	
大阪薬科大学	1		早稲田大学	1	1
大阪電気通信大学	1	1			
関西大学	7	1	〔専門学校〕	現役	卒業
関西学院大学	9	2	ECCアーティスト専門学校	1	
関西外国語大学	3				
京都外国語大学	3		〔海外の大学〕	現役	卒業
京都女子大学	1		Temple Univ. (日本・米)	4	
近畿大学	1		Univ.of New York (米)	1	
慶應義塾大学	3	2	Syracuse Univ. (米)	1	
甲南大学	1	1	Snow Collage (カナダ)	1	
神戸芸術工科大学	1		Saint Mary's Univ. (カナダ)	1	
神戸女学院大学	2		Memorial Univ. Of Newfoundland (カナダ)	1	
国際基督教大学	1		The Univ. of New South Wales (豪)	1	
上智大学	13		上海外国語大学 (中国)	1	
四天王寺国際仏教大学	2				
芝浦工業大学		1	〔就職その他〕	なし	

7ヶ国語で生徒宣誓

第13回入学式

春の到来が遅かった今年は、4月4日(金)の入学式も雨に見舞われた寒い一日となってしまいました。しかし、52名の中等部入学生(7年生)と69名の高等部入学生(10年生)(うち、内部進学者52名)が、森路佳先生の指揮によるミドルスクールバンドの皆さんの厳かで力強い演奏のなか希望にあふれる笑顔で入場する姿が、さわやかで暖かな春の風を運んでくれました。

毎年恒例の生徒宣誓が、今年は7ヶ国語で行われました。海原颯さん(7年、中国語)、阿部真夕さん(7年、日本語)、リッチフィールドソフィアさん(7年、英語)、神澤麻友さん(9年、ドイツ語)、松尾佳宏君(10年、タイ語)、金碩柱君(10年、朝鮮語)、藤本琢也君(12年、スペイン語)の7人が、堂々とそれぞれの言語で世界人権宣言に基づいた生徒宣誓を行いました。

(井藤)



意欲あふれる中部卒業式

3月11日(火)に中部部の卒業式がシアターで行われました。ゼッケンをつけた馬場先生がゴールテープを切る場面からスタートした卒業式。卒業証書を授与されたあと壇上での「ハイ、ポーズ」。3年間の中学生生活のゴールをむかえ、高等部へすすむ意欲あふれる表情が見られました。

森藤祥子さんと獅子倉玲奈さんによる卒業生代表のスピーチ(それぞれ日本語と英語)は、ここまで成長したことに対する周りの人への感謝の気持ちがあふれるものでした。

なお、卒業生のうち、山本拓宣君がタイへ、細井沙織さんが東京へ転出しました。二人の新しい地での活躍を応援しています。

(井藤)



とことん taste youth through 北海道

高等部学年旅行

田中実生子

高等部3年、旅行委員長

去る春休みの3月14～18日まで、北海道に修学旅行に行ってきました。まず初めに私が言いたいのは、本当にたくさんの感謝の気持ちです。ありがとうございました。私だけじゃなくみんなそれぞれに苦労はあったと思うけど、何より私みたいな人間が旅行委員長なのをやったことが間違ってたと思うのに最後までみんなに助けてもらいっぱなしで、けど旅行を成功することが出来て良かったと思います。

北海道に決まるまでは、後に説明がありますが国内旅行という規定から学年で行きたいところ・やりたいことを投票して1位になったからです。その段階の投票には週1回の船でしか行けない小笠原諸島という案もありました。北海道と言ってもとても広いので、有名箇所と雪具合から10ヶ所程挙げてLongHomeRoomを使ってプレゼンをして、それから投票をしてもらいました。その結果、札幌・函館・小樽・帯広・網走が上位に来たので、その5ヶ所に決まりました。しかし北海道内は広いので移動が大変だし全部の場所に行くことは予算的に無理なので、初めに2ヶ所に分かれて行き、その後に合流する、というのに決まりました。初めに網走に行くコースは“大阪⇒網走⇒札幌⇒函館⇒大阪”、同じく帯広に行くコースは“大阪⇒帯広⇒札幌⇒函館⇒大阪”でした。2都市目の札幌で全員が合流、その後一緒に行動、というものでした。

網走のコースから簡単に説明をする、1日目にわかさぎ釣りorアイス作りを体験したあと博物館網走監獄（明治45年に建築された網走監獄の建築物を昭和60年に移築し一般に公開。約5万坪の広大な敷地に20棟あまりの移築復元造物が立ち並び、約100年の監獄の様子を展示している博物館）へ行き、その日は旅館へ。2日目は朝から流水クルーズへ行きました。今年はと

てもついていて、何十年に1度の大量の流水が流れ着いていたので、クルーズが行くコースが流水に阻まれて短くなってしまったくらいでした。しかし、がりがりと流水の上をクルーズが進み、すぐそこに流水が見えるという感じでとてもきれいでした。本当の流水という海の色は青く、だいぶ遠くのきれいな流水は青色をしていました。そのクルーズが終わった後は本物の“網走刑務所”へ行き、記念撮影。それから札幌に向けて約6時間かけて列車で札幌まで移動しました。

帯広のコースの人は1日目に牧場にて乗馬orビート工場資料館見学をしたあと帯広百年記念館を見学し旅館へ。2日目は朝早くにホテルを出発し、熱気球を体験。朝早いけど思った程寒くはなかったし、かなり高い所まで行けて感動しました。その後ホテルに戻って朝ご飯を食べてから広瀬牧場へ。搾乳・アイス作り・講話を時間内に各自で見学。ここの牧場の人は牧場のプロでたくさんの知識を持っていました。そのから約2時間半かけて札幌へ列車で移動しました。

3日目からは全員で一緒に行動。朝旅館を出発して小樽市内へ。そこでオルゴール作り・ガラス細工・美術館見学に分かれて午前行動終了。その後は小樽に残る組と札幌市へ行く組に分かれてグループ自由行動。夕方までの時間をそれぞれグループに分かれて行動してもらいました。集合した後はホテルへ。3日目はそれぞれだったのですが、結構時間があったのでそれぞれで楽しい時間をすごしたと思います。

4日目はアイヌ博物館見学。入り口におっきな像があり、アイヌの踊りで歓迎してくれました。アイヌの刺繍・ムックリ（で糸を歯で弾くアイヌの楽



器）作り・舞踊・木彫りを半分くらいの人が体験し、アイヌのお昼ご飯をいただきました。鮭の丸ごと塩焼きやおいしいおもちもありました。その後函館へ移動。たくさんの方がいたので並びましたが函館山へロープウェイに乗って登りとっても綺麗な夜景を見ました。その後最後の宿泊旅館へ。ロープウェイに並んだので時間があんまりなかったのですが宴会も多分盛り上がったと思います。

最後の5日目、函館の朝市を見学しながら約2時間のグループ自由行動。その後熱帯植物園を見学し五稜郭へ行き、帰阪しました。

1日1日を細かく書きましたが、たくさんの体験をしたり予算いっぱい楽しい旅行ができました。その分、みんな疲れちゃったと思うけど、学年でいける最後の旅行だったと思うし、これから忙しくなるからみんなとこういうたくさんの行動を一緒にしたことは良かったと思います。北海道はとても広いので、基本的に移動はバスです。上で列車と書いていないところは全部バスで、予算の関係もあり、全部一括して同じバスさんをお願いしていました。おうびん交通のガイドさんと運転手さんも安全に案内して頂いてありがとうございました。

長くなってしまいましたがこの旅行に至るまでには本当にたくさんのことが学年、旅行委員の中でありました。発足したのは高1の9月でした。中学の修学旅行の時もお世話してくれた福島先生が旅行担当になってくれて、まだ旅行まで日があったのでじっくりと決めていました。しかし高2になっ



ていた旅行が急遽「国内へ変更」になってしまいました。さすがにこの時は私を含め旅行委員はとも落ち込みました。それから立ち直るまでもなく、旅行までの日が迫り、3ヶ月程で北海道旅行を決めていけないといけなかったりで、結構大変でした。けど、これだ

の出来なかったと思います。私が旅行委員長じゃなかったら絶対にもっと違う旅行になったと思うけど、それでもいつも助けてくれて、成功に終われて、帰りの空港に着いて解散になった時、旅行委員の子はじめ、みんなに感謝でいっぱい泣きそうになってました。みんなが楽しかったねって言うのを聞いただけで救われたし本当に嬉しかった。これからは高3で忙しくなってくるけど、こんだけたくさんの日をみんなと北海道で過ごしてアイスを作ったり、気球に乗ったり、オルゴールを作ったり、夜景を見たり、本当に楽しかったしまた卒業してだいぶ経ってみんながこの旅行を思い出した時、いい思い出だったねって言えるものになったことを願ってます。ほんっとに、ありがとうございました。

て、担任にたくさんの移動があり福島先生は私たちの学年から離れてしまいました。なのでそこでまず担当の先生が高橋先生に変わりました。また、じわじわと旅行委員会に来る委員が減ってしまってきたりして、旅行委員内でもめたこともありました。また間近になってからその頃近辺で起こったテロへの警戒があるからと、タイに決まっ

けたさんの困難があったけど旅行に行けたのは、阪急交通社の穴井さんをはじめ、すごくみんなが協力してくれたのがあったからだと思います。本当に本当にありがとうございました。私はみんなが旅行に参加してくれることだけでとても救われるしタイから北海道になってからのみんなのすごい大きかった協力がなかったらこんなにいい

旅行委員をして良かった

中部部学年旅行・広島県宮島

松田真依

高等部1年、旅行副委員長

中学時代最後で最大の行事とも言える学年旅行。最初、「学年旅行の必要性」と言うテーマから始まりました。各クラスから「是非やりたい」と言って集まった16名で旅行委員会を発足。16名の意見は「必要」だと言うことになりました。先生から「では、何故必要なのか？」と私達に問いかけられ、みんなは「中学校の思い出作り」や「みんなの絆を深めるため」等、沢山の意見を出し合いそれをまとめ各クラスに報告しました。

10月後半頃から放課後、定期的に話し合い、行き先やプラン、予算などを考えていきました。最初はアンケートをとったり、プレゼンテーションを沢山行ったりしてなるべくみんなの希望を取り入れようと努力したのですが、なかなか意見がまとまらず、旅行委員の中でも意見が分かれるような事態になってしまいました。このままではいつまでたっても結論が出ないと判断した私達は、どうすれば意見がまとまるかミーティングを行った結果、「いくつかのプランを旅行委員会で作成し、その後、みんなに希望調査を行い、最終的に細かい部分は旅行委員会が決定しよう。」ということになりました。

ほぼプランが完成した今年1月、保護者対象の説明会を行いました。この時、提出したプランは委員会なりに



納得していた

のですが、保護者の方々から容赦ない指摘を受け、私達だけでは分からなかった問題や、あやふやな点を知ることができとても良い勉強になりました。保護者の方々からの意見をとりいれ、最終的にプランを完成させ、そこから予約をしたり、グループを決めたりしている間に、3月になっていて、気がつけば本番という感じでした。

今回旅行委員という大きな仕事をして、私達が得たものはとても大きいものであると思います。初めは、旅行委員になったみんなが、「旅行委員なんかやらなかったらよかった」とか言っていたのですが、全てが終わり、最後に集まった時には、旅行委員全体から、「旅行委員をやった本当に良かった！」という言葉聞くことができ、なんだか今までのストレスとか疲れとかが吹っ飛んだ様な気がしました。私自身、旅行委員会をやっていて本当に良かったと思いますし、ものすごく勉強になりました。普通に公立の学校ではこんな事経験出来なかったと思いますし、千里国際学園だからこそ経験できた事だと思います。この経験を生かしてこれからも色々な事に挑戦していきたいと思います。

ワールドリーダーズサミットに参加して

佐野里佳子
高等部2年



私は、この春休みFuture World Leaders Summitに参加しました。去年の暮れ頃このsummitの存在を知り、参加したい！とすぐに思いました。サミットでは、高度な英語力と社会的な知識が必要とされていたので、私には、難しいかな…、と思いました。でも、私は、参加したいという自分の気持ちに任せて参加を挑戦してみました。選考試験の結果までですがが思いでしたが、行けるという知らせが来た時は嬉しくて信じられませんでした。

出発した日は、イラク戦争が開戦した日で飛行機の中でその開戦が決まったというニュースを聞きました。すごく不安だったけど、こんな今だからこそ私は、行くべきだと思って不安を、なんとか吹き飛ばしました。ワシントンD.C.のダレス国際空港にやっと着いたと思ったら、信じられない事が起こりました。入国審査の後、私以外の日本人の人達は、スムーズに出口へ行けたけど、私だけは、違う列へと誘導されました。なぜだろう…、と思ってその私を誘導した人が見た私のパスポートを見てみました。するとインドネシアに住んでいたと言う表示のページを見た様でした。その列には、大きな荷物をもっているイスラム系の人やアジア系の人達が並んでいます。そして私は、自分がインドネシアというイスラム圏の国の帰国子女だからこの列に誘導されたと言う事に気がきました。その列に並んでいる間は、"discrimination"と言う言葉が私の頭の中で回っていました。そして、悔しくて涙がこぼれ落ちてしまいました。その列の先にある長い荷物検査とボディチェックを終えた後、やっと出口に出る事ができました。その時は、すごく悔しくて辛かったけど、でもこれが事実なんだ…、と思ってこの経験を強みにして行こうと思いました。この最初のハードルが、私のサミット生活のベースとなったのかも知れません。

Summitが始まって一日目、初めてのdelegation meeting。InstructorのMikeがみんなにメンバーそれぞれSummitで話し合うTopicを与えていきました。Topicは、10個あって、Terrorism, International Aid, Human Rights, Peace-keeping, Environment, Health Concern, Technology, Arms Control, Refugees and Trade。私のTopicは、International Aidでした。日本は、International Aidを沢山、発展途上国にしている国の一つです。代表としてしっかりと知識を持ち意見を言っていかなければ…、と責任感を感じました。私は、いつか難民キャンプなどを回って国際援助に参加したりその地の現状をジャーナリストとしてレポートしたいと思っているので、このTopicは、私にすごく向いていたと思います。そのTopic発表の後、Mikeは、delegationをまとめるhead of stateが必要で誰かなりたい人は、いませんか？とみんなに呼びかけました。ゆっくり悩む暇もなく、でもなんだかやらないと後悔をしそうな気がして勢いで手を上げてしまいました。私を含めて手を上げたのは、3人。一人は、19歳の大学生ともう一人は、交換留学中の同じ年の女の子でした。Japanをdelegationに選んだ外国人の人達と他の日本代表メンバーが私達3人の顔をじっとみます。アピールスピーチは、緊張してへんてこりんな事を言ってしまったけど、でもやりたいと言う気持ちを精一杯伝えたつもりです。そして、delegationのみんながhead of stateを選ぶvoteをします。信じられない事に私が選ばれました。この時は、本当に嬉しかったけど、大変なのはこの後でした。

Head of stateだけがsummit中、Japanとしての質問や意見を述べる権利があります。だから、delegation meetingをまとめる事、そしてみんなの質問や意見を理解する事が私の役目でした。

Delegation meetingでもみんな本気で話し合うので

meetingをまとめていくのは、すごく大変でした。みんなの質問や意見を400人近くの前で代表して聞く事は、毎回緊張と責任感の連続で胃が痛くなってしまいう仕事でした。そんな中、英語が通じない時、疲れ果てて英語が出てこなくなった時は、恥ずかしくて悔しくて泣いてしまった事もあったけど、まわりの人たちが支えてくれてありのままの自分を素直にさらけ出す事ができて、必死にその時を乗り越えられました。

Working group of International Aidでは、Communique作りの為必死に話し合います。Summitのruleは、そのtopicをdiplomacy, economy, militaryの3つのポイントと共に考える事。そこで、Economical sanctionや Technical Aidの重要視する必要性などを中心に私は、自分の意見を作り上げていきました。本気の話し合いですごく早い英語の話し合いの中でその自分の意見を言うのは、なかなか難しい事だったけど、世界の代表達の自分の意見へのreplyを聞くのが快感になっていきました。Communique作りの際に必要なのは、話し合いだけでは、ありません。各界の代表のセミナーを聞き社会問題へ対する意見などを知る事や各国の意見を求めるために多くの大使館をまわる事もCommunique作りには、欠かせません。毎回そのセミナーの話し手は、パウエル国務長官などの今ニュースで毎日見るような顔ぶれでした。自分の質問や意見をその様な人たちに直接ぶつけて、自分に対して答えている姿みて、これは、全て夢なんじゃないかと疑ってしまう反面自分の日本代表としての責任感をみしみしと感じました。こうして日々、話し合いと経験を重ね、私達のCommuniqueは、出来上がりました。晩御飯も食べずにcommunique

(次ページ★に続く)

「チムニー」 サイエンスキャンプに参加して

安藤ゆかり
高等部3年

私は春休み中に、サイエンスキャンプに参加して横須賀の海洋科学技術センターで二泊三日してきました。サイエンスキャンプにはいろいろな種類があって、その中でも私は海が好きだから海洋を選びました。三日間その敷地内から出ることはなく、私にとってはとても現実離れしたところだったと思います。高校生が対象で全国各地から集まっていて、北は岩手県、南は沖縄県から参加人数は26名でした。夕食の後は、来ていたみんなと方言で話したりして盛り上がりました。

このキャンプでは講義もあり、今まで全然知らなかった範囲の知識が毎日得られたので少しかしくなった気がします。たとえば、実は海底からマグマが出ていてそれが水温によって冷え固まって逆ツララのようになったもの

を「チムニー」といい、さらにそれに含まれている化学物質を栄養にして生きているエビの一種がその近くにだけ大量に生息していたりします。

貴重な体験もいろいろしました。私がもっとも楽しみにしていた「4気圧体験」は想像以上

にいろいろな変化が起こりました。潜水シュミレーターという潜水艦のような形をした所に入り、その中を20分くらいかけて4気圧にしました。急に気圧を変えると鼓膜や肺が破れたりするからです。4気圧とは、深海30メートルの位置で、そこに達するまでに何回も耳が痛くなったし、とても暑くなりました。ウチワで扇ぐといつもよりまだいぶ空気が重く感じたり、窒素の分圧が高くなり窒素酔いというのにか



かってしまい、頭がふらふらしたりしました。元の気圧に戻すときはすごく室温が下がり寒かったです。その他に、大きい深いプールでスキューバダイビングも体験しました。

この三日間はとても有意義だったとおもいます。夏にもサイエンスキャンプがあります。いろいろな分野のキャンプが用意されているので興味ある人はぜひ参加しましょう。

(前ページ★の続き)

作りに没頭していたから、最後のほう、疲れ果てた私は、英語がスムーズに出なくなってきたりして、すごく悔しかった。でも短期間しかないのだからSummit中は、1分1秒が貴重に感じてそして、体力を絞りきってでも絶対とことんがんばろうと思っていました。私達のcommuniqueの内容を簡単に紹介すると…、まず、IAO(International Aid Organization)と言う組織を国連の一部として作り、そして、そのorganizationで今international aidを中心となっているNGOや他のorganizationの欠点などを分析してその欠点から学んだ事を教訓に、様々な新しいinternational aidの形を広げていくと言うものです。私達のcommuniqueが少しでも今のinternational aidの改善に役立つ事を私は、心から願っています。

そしてSummitの最終日、ending ceremonyと言うのがありました。その時、

私は、head of Japanとしてスピーチをする事になりました。スピーチのtopicは、heroでした。私は、" My own hero is myself"と言うのをmain ideaにスピーチをしました。自意識過剰みたいだけど、私がheroは自分自身と言ったのは、私は、自分の経験や過去に支えられて生きているなあ・・・と感じたからです。私の過去は、結構激しくて乗り越えるのが大変だったり、苦しいと感じる事が多かったと思います。でも、その過去を経験したからこそ今の自分があるのだと思うから、そして努力すると形になるという事を経験したことによって知っているから、今私は、前進できると思います。だから、私は、これをSummit中にすごく実感しました。だから自分のheroだと言いました。500人以上の観客の前でのスピーチは、生まれてはじめての事で体が震えました。でも、終わった後、みんなが立って拍手してくれた時は、今まで

辛かったけれども乗り越えてきてよかったなあ…、と実感できる一瞬でした。Summitを終えた今、私は、すごい達成感とこれからは、もっとがんばっていこうと言う前向きな気持ちでいっぱいです。なかなかうまく言葉でこの気持ちを表せないけれど、とにかく、本当にSummitに参加してよかったです。Summitでこの様な経験をできたのもSummit前に応援してくれた人、Summit中、私を支えてくれた人がいてくれたからこそだと思います。だから、その人達に、まず「ありがとう!」を言いたいです。そして最後に、「素直に前向きにがんばっていこう!」と自分自身に言いたい、because I am the hero of myself and I want to be a hero of myself forever!

バイリンガリズム通信 (5)

難波和彦
英語科

前回に引き続き学会での発表の内容を説明することで、子供のバイリンガル言語習得についての、ひとつの観察を紹介します。昨年12月最後の週に、AILA(国際応用言語学学会)の第13回世界大会がシンガポールであり、そこで発表をしてきました。この学会は3年に一度行われるもので、1週間にわたり約1000の発表があるという大規模なものです。今まで、本や学術雑誌で読んで名前を知っていた私から見れば、雲の上のような有名な言語学者たちを、じかに見てその話を聞くことができたのは、貴重な体験でしたが、さらにおどろいたのは、そういった人たちが、実に気さくに話をしてくれるということでした。「言語学」という共通の興味があり、英語を使うことができれば、世界は開けるんだなということであらためて感じました。

さて、私の発表は、「環境が変化する中でのバイリンガルの子供の文法の発達」についてでした。私の研究では、子供がPhase I (0-4歳まで家庭で言葉を使っている時期)、Phase II (4歳-4歳5ヶ月まで、幼稚園に行き始めた時期)、Phase III (4歳6ヶ月-5歳4ヶ月、イギリスに移り小学校に行き始めた時期)と環境が変化をしていく中で、彼の文法がどのように発達していったかのを、英語と日本語の両方で見ました。英語と日本語がお互いに影響をしあっている面についてもみたのですが、今回の発表では、二つの言語の文法の発達を別々に見た後、比較をしてみました。環境の変化に伴う文法の発達を見るということなので、対人関係において重要な役割を果たす"疑問文"、"付加疑問文(相手に同意を求めたりするときに使う)"などが、どのように使われているかについて、調べました。私のデータでは、表のように、疑問文、付加疑問文ともに、日本語のほうが、英

語より早く使い始め、しかもきちんとした形で使えています。

Phase Iのころの、英語の疑問文を見ると、"What this one is a?"というように、まだ語順をうまくならべられません。Phase IIIになって、やっと"Where do you start from?"というように、英語の疑問文としての形を使うようになります。一方日本語を見ると、Phase Iの時点で、"エリス(弟の名前)、何もってんの?"という疑問文を使っています。同意を求める"付加疑問文"を見てみると、英語では、"That one is two, isn't it?"という形がPhase IIIになって初めて出現します。日本語のほうでは、Phase IIの時点で、"テリータビーがタビートースト食べなくてもいいでしょ?"というように、"同意を求める表現"を使っています。

このことについて、二つの見方ができます。ひとつは、環境の変化によって、社会的な必要性ができ、その形を使うようになったということです。Phase IIに日本の幼稚園に行き始めた時に、自分の意見を主張する必要が生まれ、"同意を求める表現"="～でしょ"を使い始め、Phase IIIで、イギリスの小学校に行き始めた時に、英語の同意を求める表現である"付加疑問文"="isn't it?"を使い始めたということです。

もうひとつの見方は、英語と日本語の文法システムの違いです。日本語で、対人関係において、重要な役割をする文法要素は、"か"や、"でしょ"などの終助詞で、この終助詞を文末につけるだけで、たとえば疑問文や付加疑問文をつくることができます。(例ーこれは僕のおもちゃ-->+疑問の終助詞"か"="これは僕のおもちゃか"-->+同意を求める終助詞"でしょ"="これは僕のおもちゃでしょ")。一方英語では、対人関係において重要な役割を果たす

文法は、主語と動詞のあたりで、かなり複雑なしくみがあります。(例ー"Ellis likes Teletubbies." --> 疑問文をつくるのであればDoesを文頭につけ、likesのsをとる="Does Ellis like Teletubbies?" -->さらに付加疑問文をつくるのであれば、主語Ellisを代名詞化して、heにして、もとの文が肯定文であれば、否定文の疑問文を作る="Ellis likes Teletubbies, doesn't he?"となる) 疑問文と付加疑問文に関していうと、英語のほうがそういった機能を果たす文法の形が複雑なために、日本語より出現が遅れたということです。この二つの見方は、相反するものではなく、おそらく両方の要素が、子供のバイリンガル言語習得に影響していることもあり得ます。

さらに、社会的な必要性があって、子供の文法システムがまだ発達していない時には、どうすることが起こるのかという疑問が生まれます。私のデータで、子供がPhase Iつまり、まだ英語の疑問文をきちんと使えていない時期に、"What's this called?" "Have you finished doing e-mail?"といったかなり難しい疑問文を発しています。これは、親の言った文をまるごとチャンク(かたまり)のまま、まねをして使っているのだと考えられます。塊のまま覚えているので、それがそのままほかの疑問文も言えるということには、つながってきません。

というような内容の発表をしました。このとき見にくてくれた人の中に、私がそもそもこの文法的な分析をしようとしたときに、まず引用をした本を書いたベルギーのバイリンガリズムの研究者が来ていて、その人自身から、いろいろな質問や、励ましの言葉をいただいたのが、一番の収穫でした。この発表のもとになった、文法と発音の発達の研究について、今年度の研究紀要で発表をする予定ですので、興味のあるかたは、ご覧ください。

	Phase I	Phase II	Phase III
英語	疑問文 未完成	疑問文 未完成	疑問文使える 付加疑問文使い始める
日本語	疑問文 使える	付加疑問文 使い始める	

<卒業生からの手紙> アジア学院の思い出

山本喜子

第10期卒業生、立命館大学2回生

お久しぶりです。去年卒業した山本喜子です。ちゃんと覚えてくれてますか??!!もし覚えてくれてなかったら、農業キャンプが大好きだった山本です。

今日ですね(2月9日 日曜日)日本経済新聞の朝刊に、アジア学院の記事がありました。見ましたか?今年で開校30周年と書いてあったのでびっくりしました。その中の二年行ったので、とても嬉しく感じています。アジア学院の楽しい思い出を思い出しながらその記事を読みました。

大学生になって、もっとアジア学院でいろんな事を留学生に聞けば良かったと後悔しています。私は立命館の国際関係学部に行ってるんですけど、2回生から協力開発のコースを受けますよ。まさに、アジア学院で学んだ協力開発ですよ。本当にアジア学院に行って今の自分があるって感じですよ。ちょっとオーバーに言ってるかもしれませんが、あそこでの貴重な時間は私にとっては、ものすごい大きなものです。それをようやく今ごろ気づくなんて!もっと前からアジア学院のすばらしさを知ってたら、もっともっと開発について留学生を通して学ぶ事ができたと思います。何も考えずに過ごしていましたが、少しは開発の難しさや、その国にアジア学院で学んだ技術を持って帰って実行する難しさなどは留学生と話した事によって学びました。技術を提供する日本の指導員の方も大変である事は十分わかっています。その国の文化や宗教が関わり合う事で様々な問題があると思うんですよ。でも、それらの壁を超えてお互いの共通する目標が一致することによってアジア学院が成り立っている事が本当にわかりましたね。それはキャンプの体験と今大学でその国の状態を学んだ事によって色んな見方ができています。このように前とは違った考えで、アジア学院を訪問する事によって更に違った見方が出来ると思います。だから、

またアジア学院に行きたいですね!そういうプログラムが同志社であるそうなんです。友達がそういう話をしていて、私がアジア学院行った事があると言ったら驚いてました。何かと言って2回も行ったので学んだとは思いますが、

大学行ってS I Sのすごさがわかりました。普通にアジア学院に行くプログラムがキャンプの選択肢の中にあったり、田中先生みたいに海外青年隊に行った話を聞けるなど、開発についてとても詳しい先生方が多い事に今になって気づきました。S I Sにいる時は、普通すぎて気づく事ができませんでしたが、一旦外に出てみるとS I Sのすばらしさに気づかされます。

すみません、長々書いてしまってます。真砂先生にこの感謝の気持ちを伝えてたて!!!あの農業キャンプは絶対になくさないでくださいね!もし参加者が誰もいなかったら、私が学校に行って宣伝するので!すばらしさを語るので、いつでも呼んでください!(笑)今年行く人がどのような気持ちであのキャンプに行くのかが楽しみです!色んなことを学んで帰ってきてほしいですね!何も考えなくても、絶対何かは感じるはずなので!

また学校に遊びに行くので、先生に会いに行きま〜す!!では、失礼します。さようなら。

春学期帰国生紹介

学年	姓	名	Last	First	在留国
07	浅井	純	Asai	June	シンガポール
07	寺田	絵里花	Terada	Erika	アメリカ
07	考藤	希	Kanto	Nozomi	アメリカ
07	森	英里子	Mori	Eriko	アメリカ
07	中野	亜希	Nakano	Aki	オーストラリア
07	上田	悠平	Ueda	Yuhei	アメリカ
07	ブラドリー	藍紗	Bradley	Aisha	アメリカ
07	ブラドリー	摩也	Bradley	Maya	アメリカ
07	荒井	遥	Arai	Haruka	アメリカ
08	大澤	萌香	Ohzawa	Moica	アメリカ
09	神澤	麻友	Kanzawa	Mayu	オーストラリア
09	梁井	結	Yanai	Yui	イラン
10	大村	ジェニファー 沙也子	Omura	Jennifer Sayako	イギリス
10	塩水流	幹洋	Shiozuru	Mikihiro	ボリビア
10	荒久田	敏紘	Arakuta	Toshihiro	アメリカ
10	田村	安佐子	Tamura	Asako	オランダ
10	林	喜恵	Hayashi	Yoshie	台湾
10	柘植	一乃	Tsuge	Ichino	アメリカ
11	高橋	智彦	Takahashi	Tomohiko	アメリカ
11	佐藤	究	Sato	Kiwamu	マレーシア
11	井上	朋	Inoue	Tomo	アメリカ
12	片岡	奈央	Kataoka	Nao	フィリピン
12	渡邊	健	Watanabe	Ken	アメリカ
12	金光	未帆	Kanemitsu	Miho	スイス
12	藤本	琢也	Fujimoto	Takuya	ボリビア
12	尾崎	真奈美	Ozaki	Manami	イギリス

■学年だより

●中等部1年生

新年度、新学年に向けて

松島 勇

1組担任、国語科

今年も期待に胸を膨らませて、中学一年生が入ってきました。少し緊張しつつも、入学できた喜びを現して、教室に座っている姿を見るのは、とても楽しい瞬間です。しかし、それと同時に考えることがあります。それは、この学校が一人一人の期待、夢に応える事が出来るだろうかということです。環境として、確かに千里国際学園、S I Sは恵まれた場所だと思います。O I Sというインターナショナルスクールが併設され、S I S自体も帰国生徒を始め様々な文化を身につけた生徒が集まっている場所です。多様な価値観、考え方を学ぶには、絶好の環境であることでしょう。ではここに通っているだけで、目標が実現できるかというと、そうでもないでしょう。環境はあくまでも環境であって、それを役立てるかそうでないかは、一人一人の主体性にかかっているからです。主体的に活動していく人は、得るものが大きいだろうし、自分の立てた目標に近づくことも出来るだろうと思います。けれども、そうでない人は期待したような結果も得られないままに、学年だけが上がっていくことになるのではないかと思います。むしろ、環境に甘んじたままで努力を怠っていると、周りから取り残されてしまうことになるかもしれません。これは、新入生に限らず、この学園の生徒全員にも当てはまることではないかと思います。

どうか、新入生の皆さんには、このS I Sという環境を最大限に活かして、のびのびと積極的に活動してほしいと思います。学校の主役は生徒なのであり、皆さんはもうこの学園の一員であるのですから。そして、在校生の皆さんにも、中学一年生のよき手本となるよう、充実した学園生活を是非送ってもらいたいと思っています。そうして、一人一人が充実していけば、千里国際学園はさらに素晴らしい環境になるだろうと思います。

●中等部2年生

宝物を見つけて

田中憲三

1組担任、数学科

この4月に大澤萌香さんを迎え、55名の学年集団としてスタートしました。そしてこの学年を田中（1組）、山本（2組）、相良（3組）が担当いたしますので、本年度も昨年同様、よろしく願いいたします。

さて、4月2日、春休み中にもかかわらず、たくさんの人が、新しく入学してくる中学1年生の学校案内の為に集まってくれました。ありがとう。25分程度という短い時間でしたが、学校中を案内して歩くみなさんの姿を見て大変ほほえましく思いました。これからはよき先輩として、やさしく接してあげて欲しいと思います。

思い返せば1年前、みなさんも希望と期待に胸を膨らませて本学園に入学してきました。本学園での最初の1年は、はじめてということで、まだいろいろな活動に積極的に参加できなかった人もいでしょう。本学園では、自らが行動を起こさないと何も始まりません。「いっしょにしてくれる友達がいたらやるのだけど…」と思いながら、なかなか最初の一步を踏み出せなかった人、今年こそは、自分のやりたいことにチャレンジして欲しいと思います。

春休みに、何人かの卒業生と話をする機会がありました。母校（本学園）での思い出話になると、話題は尽きることはありませんでした。目を輝かせ、温かな表情で話すその姿を見ていると、この学園での生活が彼らにとってのかけがえのない宝物になっているのだなと感じました。是非みなさんにもこれからの学園生活で、たくさんの宝物を見つけていって欲しいと思います。そのために今必要なのは、ちょっとした勇気だと思います。がんばってください。

●中等部3年生

一人でいることの出来る人

木村典子

1組担任、国語科

新年度が始まりました。9年生は1

組が木村、2組に廣田先生、3組の担任が中村先生、4組をDatta先生でスタートしました。この学年はクラスの枠をはずして、学年として見ていきたいと考えています。一つの学年で成長していけばいいなと思っています。ですから生徒達も担任以外の先生にでも、いつでも何でも相談して下さい。

ここで、一つ提案があります。中等部3年生はハイスクール扱いで、今までとは大きく変化する学年です。これを機に変身してみませんか。

変身の内容は「一人でいることの出来る人」にです。今でも十分に一人でいることの出来る人、その人は今まで通りで構いません。でも中には、一人になりたくないために、無理をしてまで他人に合わせている人がいませんか。協調性は大事なことです。それはいつも人と一緒にいることではありません。

四六時中、他人と一緒にでは疲れてしまいます。もし無理をして合わせているなら尚更です。一人でいることを楽しむ余裕を持ってほしいのです。

この学校は授業選択も個人個人で違います。このチャンスを活かして一人を楽しむ強い人になって下さい。いつも友達と一緒にでなければ不安だというような人になってほしくありません。それが大人への第一歩だと思います。

個人でいることを大切にし、必要な時にはいつでも団体行動を取れる人。そんな生徒が多い集団であれば、素晴らしい学年になると思いませんか。

●高等部1年生

新しいことに挑戦を

中尾直子

2組担任、保健体育科

千里国際学園高等部にご入学おめでとうございます。いよいよ3年間の高校生活が始まりました。先日、読んだものの中に、なぜ年を取ると時間が進むのを速く感じるのかという考察がありました。要は、新しい刺激が多い子どもは脳がひとつひとつのことを処理、記憶していくのでたくさんの時間と感じ、おとなになるにつれ、あまり考えずに物事の処理ができていき、脳



高等部1年最初のLHRは千里北公園でお花見

が働いたという感覚が無いまま気が付いたら時間が過ぎていた、ということでした。つまり、高校生活は仕事量では圧倒的に中学3年間よりもできるのですが、気づいたら卒業ということになるわけです。ですから、10年生のみなさんは、是非なにか新しいことに挑戦してってください。大きなことでなくてもいいのです。今まで、苦手だろうと思って避けていたこと、なんか大変そうと思っていたこと、そんなの面倒と思っていたこと。違う自分に会えるかもしれません。子どものときのように一日が長く感じられるかもしれません。本当に今が一番のチャンスです。心して一年を過ごしてください。

●高等部2年生 Spring 2005 にむけて

井藤真由美

1組担任、英語科

11年生として、順調なスタートを切っている様子です。4組に井上朋さん(アメリカより帰国)、3組に高橋智彦くん(同じくアメリカより)と二人の仲間が増え、学年の人数は82名となりました。担任団では、エイブリー先生と福島先生がこの学年を去られ大変さびしいことですが、今年度は1組:井藤(英語科)、2組:馬場(数学科)、3組:ファイファー(英語科)、4組:土佐(理科)の4人で気持ちも新たに学年のみなさんをしっかりサポートしていきたいと思っておりますのでよろしく

お願いいたします。

さて、タイトルに掲げたSpring 2005というのは皆さんがSISを卒業する春です。気がはよい、と思われるかもしれませんが、10年生としての学年が終わり、新学年も皆さんとともにすすんでいくことが決定した頃から私の心の中ではSpring 2005 と書かれた旗がはためている気分です。(その日を心待ちにしている、という意味ではありません。誤解のないように!) 2年後に皆さんがどんな気持ちでそれぞれのような新しい世界に旅立っていくのだろう、その時に皆さん一人一人の最高の笑顔を見せてほしいな、そのためには今からの2年間はどんな時間であるべきだろうか、、、そんなことを思っています。11年次、12年次は2年間という時間の単位の中で考えるべきことが多くあります。日々の学習や活動、例年どおりの学校行事のほか、学年旅行についてしっかり取り組んでいきたいですし、進路についても一緒にじっくり考える時間を持ちたいと思っています。

Spring 2005を『思い残すことなし!』という最高の気持ちで迎えられように、毎日毎日を大切に、話し合うことを大切に、妥協しない態度を大切に、自分を大切に、仲間を大切に、お互いがんばっていきましょう。

<学年旅行アンケートにご協力いただいた保護者の皆様へ>

先日のご家庭で学年旅行について話し合う時間を持っていただくようにお

願いしましたところ、お忙しい中時間をつくっていただき、アンケートへの回答も51家庭よりの提出がありました。あらためて、“ご協力ありがとうございました。”

すぐに読ませてはいただいたものの、まとめる作業は春休みとなってしまいました。アンケート結果を匿名の形でまとめたものは、現段階では、こちらの判断で旅行委員にのみ渡しています。

読ませていただくと、ご家庭で旅行のことについて話す時間を持っていたいたその様子がとてもよくわかります。具体的な行きたい場所を挙げての話し合いがあったご家庭もあり、また、これをきっかけにいろんなことに話がはずんだであろうことが想像される回答も多く、ありがたく思っています。

このアンケートをさせていただいた主旨は、学年旅行は生徒たちが自分で決め、作り上げていくべき旅行ではあるけれど、保護者の方々がどういう風に考えておられるかを常に意識しているべきであるし、また、自分たちで決めていく旅行であるということ=自分たちだけですべてを決めていい、ではなく、今後、担任団、保護者の方々、旅行社の方、と話し合いながら旅行の計画が進められていくべきであると思いますのでその第一歩にしたいということです。

もちろん、書いていただいたことは、「参考にさせていただく」のであって、このアンケートの内容によって生徒たちの話し合いの範囲が限定されてしまはいけなとも考えています。もとより、書いていただいたご意見には、ある点において全く正反対のものも含まれていますので、すべてのご意見を吸収するのは不可能でもあります。が、少なくとも旅行委員のメンバーには書いていただいたことの一つ一つのメッセージ、保護者の方々の想い、をしっかりと受け取って欲しいと願っています。

なお、ここまでの旅行委員の活動としては、学年旅行に行くことを1月に決めました。基本的に自由参加ではあるけれど、できるだけ多くのメンバーで、誰もが満足できる旅行を目指して

作り上げていこう、ということ話を合ってきました。3月4月にかけて旅行のテーマを決めました。「一期一会」です。現在は、国外の各国における危険性を調査し、その情報を元にして行き先をどこにしようかという調査、話し合いに入りつつあるところです。

テロ、戦争、SARS…、と世界情勢はなかなか落ち着きを見せてはくれません。安全面ということをおろそかにせず、生徒たちののびやかな発想をたいせつにしつつ、一年後に向けて旅行計画を進めていきたいと思っております。今後ともご協力のほどよろしくお願いいたします。

こちらのほうはSpring 2004に向けて…。

●高等部3年生 いよいよ高校3年生

高橋寿弥

1組担任、数学科

残りの学園生活もあと1年弱になってしまいました。月日の経つのは本当に早いものです。生徒の様子を見ると、大多数が自分たちの将来のことを真剣に考え始め、その準備に個々に取り組みつつあるようです。私たち学年の担任は、彼ら・彼女たちが、自分の第1目標を無事に達成できるように心から願っています。

それと、3月の学年旅行の様子を私なりに報告しておきましょう(詳しいことは12年4組の田中美生子の記事をご覧ください)。

北海道は、3月と云えどもまだ雪に覆われていて、大阪よりは勿論寒かったのですが、思ったよりも冷え冷えとはしていませんでしたので、比較的過ごし易かったです。初日(3月14日(金))に、関西空港から、帯広組・網走組の2グループに分かれて出発し、初日は帯広組は乗馬体験・工場見学を、網走組は公魚釣り・アイス作りを体験しました。その日はそれぞれ帯広・網走に分かれて宿泊し、2日目は午前中、帯広組は熱気球に乗った後牧場で搾乳・講話・アイス作りを体験し、網走組は流水クルーズ(砕氷船)に乗った後、網走刑務所・海鮮市場に行きました。

その後2グループとも電車で札幌の定山溪に向かい、そのホテルで合流し、同じ場所で宿泊しました。3日目以降は全員揃って行動しましたが、3日目は小樽(運河工芸館・オルゴール堂・ビネツア美術館)・札幌駅周辺めぐりを小グループに分かれて行い、その日は札幌のシティホテルで宿泊しました。4日目は札幌を出発し、白老(しらおい)のアイヌ博物館へ行き、体験学習をした後アイヌの郷土料理を食べ、函館に行き、函館山に登って夜景を見ました。その日は函館市内の湯の川温泉に宿泊しました。最終日5日目は函館市内の朝市・海峽市場・熱帯植物園・五稜郭公園等を見学し、帰り

も帯広組・網走組に分かれて関西空港に帰ってきました。

3人位病人が出ましたが重いものではなく、全員無事に帰って来れてよかったと思っています。また、北海道での様々な経験は、生徒たちにとって何物にも変え難い貴重な宝物として心に刻み込まれたことだと確信しています。

4月には、5名(女子3名・男子2名)の編入生を迎え、合計90名(1組23名・2組23名・3組22名・4組22名)でスタートしました。5月にはもう1名編入生が入る予定です。皆のこれからを健闘を心から祈っています。

エッセーコンテストで佳作に選ばれる

英語科

井藤真由美

高等部3年生の左海知里さんが、「第16回朝日ニッケ英文エッセーコンテスト」に応募し、全国よりの4,087作品のなかから、惜しくも入賞は逃しましたが佳作に選ばれました。この結果は4月12日(土)の朝日新聞にも掲載されています。



左海知里さん

知里さんがこのコンテストに応募することを決め

たのは締め切りの数日前のことでした。3つ指定されていたタイトルより、「What is Internationalization?」を選び、自らの経験(一般生としてSISに入学したあとイギリスで暮らす機会を持ち、その後もう一度日本で、SISで過ごすという経験)の中で感じてきた思いを率直に表現したエッセイを仕上げました。

知里さん自身による内容紹介

今日の日本ではさまざまなシチュエーションにおいて『国際化』という言葉を目にするが、今多くの日本人がその意味を取り違え、「empty catchphrase」となってしまった」ということを書きました。本当の意味での「国際化」とは、単に異なる文化を受け入れたり自分の国の文化を世界に広めるだけではなく、自らの文化を尊重した上で他の文化を尊重することだと私は思っています。



英語科の前の掲示板にはこのようなコンテスト(エッセイ、スピーチ)の案内が常にはり出されています。知里さんの例でもわかるように、SISでの生活で日ごろ感じていることを、いつもの英語の授業中に書くのと変わらない方法で取り組めば、特別多くの時間を費やす必要なく応募できるコンテストも多種あります。皆さんもぜひどんどんチャレンジしてみてください。知里さん、おめでとう。

異動のお知らせ

<新任>



箕浦尚美 (国語科)

はじめまして。4月から国語の授業を担当しています。実は、つい数ヶ月前までこの学校のことを知らなかったのですが、初めて訪れた時、その穏やかで明るい素敵な雰囲気、是非私もこの空間でこの生徒達や先生方と一緒に時を過ごしてみたいと思いました。原稿を書いている今は、まだ1週間目なので少々緊張していますが、最初に感じた通りの学校であることを確信し、これからの毎日を楽しみにしています。

授業中に積極的に質問や意見を言ってくれる生徒が多くいることはとても嬉しいです。次にはどんな質問が出るのだろうとドキドキしています。生徒達の知的好奇心を満たすことのできる楽しい授業を目指して頑張りたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

南 淳 (社会科)

はじめまして。そして一部の生徒の皆さん、再びこんにちは。今学期から正式に社会科の非常勤講師となりました、南淳です。この度、生徒の皆さんとこの学園の空間を共有できることになり、僕自身『喜び』と『縁(!?)』を勝手ながら感じている次第です。自己紹介として、趣味はスポーツ・バスケット、音楽演奏、武道など…。『楽しい授業』をしていきたいと思いますので、よろしくお願い致します。

河合英美 (生活科学)

はじめまして。生活科学の河合英美

です。この学校に来てまず最初に驚いたのが、チャイムがないということです。まだ慣れていない私は、時間をいつも気にしながら毎日を過ごしています。今までの経験だと、チャイムが鳴らない＝時間にルーズになるという感じだったので、遅刻もせずみなさんが授業に来てくれることが、とても新鮮です。よろしくお願いします。

Derek Entwistle (P.E.)



My name is Derek Entwistle and I am from Geelong, Australia (Geelong is a small city of about 250,000 people- one hours drive south from Melbourne). I taught P/E, Health and English at a High School in Geelong for over 13 years before coming to Japan with my wife (Mrs "Whistle"- Elementary P/E) and I worked for NOVA as a language teacher and Assistant Trainer for 18 months or so. My interests include all sports, photography and travel. I have greatly enjoyed my time in Japan thus far and have developed a fondness for all things Japanese ranging from sake to sumo... I look forward to working with all the staff, faculty and parents as part of the SIS/OIS community. Thank you, Derek.

高橋潤 (情報科)

特別非常勤講師として4月から3ヶ月の間、



Information Technology 1の授業を担当させて頂くことになりました、高橋潤です。現在は大阪大学博士

課程在学中で、主にネットワークの研究に従事しています。近年のPCの普及やインターネットの高速化により、コンピュータはより生活に近いものになりました。特に、会社や学校ではコンピュータの活用は必須です。皆さんがこの授業で学んだ事を生かし、積極的にコンピュータを利用できるようになれば良いと思っています。短期間ですが、どうぞよろしくお願いします。

<退任>

小山田敏 (数学科)

現在、私は大阪大学大学院の方で数学の研究をしながら柔道の練習に勤めています。そして、4月からはティーチング・アシスタントとして大学1年生に数学を教える仕事を始めました。環境や状況こそ変わりましたが、数学を教える事だけは変わらずに続けています。

SISでの3ヶ月は、「あっという間に」どころか「あっという間もなく」過ぎてしまったような気がするほど楽しく変化に富んでいて、そのうえ私に様々な経験を与えてくれました。これも生徒のみんなと教職員のみなさん他、学校に関わる多くの方々のおかげだと思っています。本当にありがとうございました。

今里拓也 (社会科)

<出向>

加納重美 (保健体育科)

シンガポール日本人学校へ(2年間)

話題 情報 連絡

千里国際学園図書館へようこそ！

青山比呂乃
図書館

* 図書館紹介

新入生、編入生のみなさん、入学おめでとうございます。そしてその保護者のみなさん、図書館へようこそ！新編入生は、すでに図書館オリエンテーションも受けて使い始めていますよね。図書館は、学園の玄関を入った直ぐ目の前です。現在蔵書は、日本語約2万8千冊、英語約2万5千冊、合わせて約5万3千冊です。ビデオ・CD・CD-ROMなどのニューメディア資料も1000点以上、新聞は日刊紙だけで、日4タイトル英3タイトル、雑誌も寄贈・購入、日英合わせて、130タイトルくらいあります。どうぞ今年もどんどん使って使い倒してください！

図書館は、授業のある日はいつも、朝8時から夕方4時半まで開館していますので、機会がありましたら、保護者の皆さんもいつでも訪問してください。保護者の方々が読書にいきなりは、生徒たちにも良い影響を与えたいと思いますので、この図書館では保護者も登録すれば本を借りる事ができます。ただし、利用規則は生徒と同じで、生徒の利用に支障のない範囲に限られます。詳しくは、お気軽に図書館までお問い合わせください。

なお、図書館では今まで2名の司書教諭（ワット・青山）と3名の図書館スタッフ（木下・川端・宮本）が働いていましたが、この4月からもう1名、ダッタ恵理奈さんが加わっています。図書館スタッフは司書として毎日働いていますが、1日中ではなく時間で交替しています。

* 蔵書点検報告

蔵書点検は、生徒ボランティアを募って毎年恒例となっていますが、今年は3月12日13日に日英すべての図書の点検をしました。今回は、3名の中学生と9名の高校生（現学年のGr8：2名Gr10：1名 Gr12：9名）、そして、8日に式を済ませたばかりの卒業生が5名も手伝ってくれました。また中学生の保護者の方も1名加わって、総勢18名が汗を流してくれました。

1日だけの人も丸2日の人も、ベテランの上級生も初めての人も、本当にとても良く働いてくれて、毎年2千冊ずつ増

えている本のデータをすべて入力し終える事ができました。今回も、ベテランのパワーがすごかった！下級生の参加者が少ないのが、今後ちょっと不安です

が、今回中1で参加してくれた人たちは、よくやってくれていました。

その結果の昨年度分の行方不明の図書リストは、現在最終チェック中で、次回のインターカルチャで報告します。皆さん、教室などで、誰も借りたかわからない図書館のラベルのついた本を見かけたら、是非、図書館へ持ってきてください。誰かがなくして、必死で探している事がありますので。（ちなみに本をなくすと、弁償する事になっています）

* 日本語図書歴代貸出記録

昨年度のインターカルチャで、日本語図書最多貸出記録の報告をしました。今回は、第1位の記録が破られる事はありませんでしたが、3月に卒業した学年の3位までと、今までの歴代の記録を御紹介します。



2003年3月卒業生 日本語図書最多貸出記録（6年間在籍）

- 1位：4組 角田 瞳さん 346冊
- 2位：4組 伊藤 愛さん 328冊
- 3位：1組 長みさきさん 277冊



1997～2003年歴代卒業生 最多貸出記録（6年間在学）

- 1位：2002年 刺賀蘭里さん 1043冊
- 2位：2002年 新井隼子さん 445冊
- 3位：1998年 沼田貴範くん 376冊
- 4位：2003年 角田 瞳さん 346冊
- 5位：2001年 松宮寧子さん 328冊
- 2003年 伊藤 愛さん 328冊
- 6位：1999年 井上愛子さん 302冊
- 7位：1997年 廣瀬裕紀子さん 291冊



残念ながら、コンピュータシステムの違いがあり、英語図書の記録はありません。図書館に読みたい本使える本があったとは限らないし、借りたから読んだというわけでもない。みんな在学期間も違うし、英語ならたくさん借りたのに！という人もいます。そういう意味では、一概には誰が一番とは言えないのですが、一つの記録として参考になればと思います。なお、現在中学3年を終えた段階で既に700冊以上借りて高校に進んだ人がいて、どこまで記録が伸びるか楽しみです。



保健室の案内

弥永千穂
保健室

7年生、編入生のみなさん入学おめでとうございます。この場をかりて保健室を紹介します。福岡出身の看護師で2年前から保健室でみなさんのケアをしているスクールナースの弥永です。月曜日から金曜日の午前8時から午後4時45分まで保健室にいます。そのうち午後12時15分から1時まではお昼休み。緊急の場合（今けがをした、腹痛があるなど）には保健室をノックしてくれたら手当てします。保健室は気分が悪くなったり、けがをした時に利用する場所ですが健康に関する相談の場所でもあります。健康の相談というとかたくなるしいですが、時には恋や性についてざっくばらんに話をしています。相談事がある場合は放課後が一番ゆっくり話せていいかもしれません。どうしても授業にでられない時、カウンセリングに行こうかと迷っている時なども立ち寄ってみてください。お話を聞いてカウンセリングの栗原先生へのアポイントメントをとったりすることもあります。また、学校生活を無理なく元気に過ごせるようにみなさんの健康状態を管理するのも保健室の仕事です。大きな病気やけが（登下校中や放課後などにけがをして病院へ受診したなど）をした

時はスクールナースへお知らせください。中学生、高校生は自己の健康管理を身につけ、基本となる体を作る大切な時期です。健康な体があつてはじめて学校生活は楽しいものとなり、勉強に集中できます。とつてもあたりまえのことですが ①必ず朝食をとって登校する ②睡眠時間を7～8時間とる ③タバコ、お酒には絶対手をださない。まずはこの3つを実行してみてください。自分の健康に不安を感じたらいつでも相談にのります。この一年、みなさんが健康でのびのびとすごせますように。

OIS/SIS Students Participate in APAC Band

William Marocco
Music

The following students participated in the APAC Band festival held at Shanghai American School, February 27 - March 2.

Arturo Amador, Alto Saxophone; Kenji Dohma, Trumpet; Misaki Cho, Clarinet; Mikari Fujita, Trombone; Momoko Hori, Bassoon; Chihiro Kato, Flute; Ryosuke Kimura, Trombone; Satomi Otsuru, Oboe; Kumar Sadavrat, Percussion; Kohei Satsuma, Clarinet; Shirley Sugino, Percussion; Christine Syrad, Piccolo/Flute; Masayoshi Takatsu, Alto Sax; and Yoshihido Moromasa.

The students rehearsed with students from all other APAC schools for three days and presented the grand concert on



Saturday evening, March 1st. The conductor was Ruggiero Barbieri, music director of the Philippine Philharmonic Orchestra, Manila. It was a great concert and an excellent musical experience for our OIS/SIS band students. The students had some sightseeing opportunities in Shanghai as well.

APACとは、Asia Pacific Activities Conference の略称で、次の学校が加盟しています。

<APAC参加校>

北京インターナショナルスクール（中国）、上海アメリカンスクール（中国）、ブレントインターナショナルスクール（フィリピン）、ソウルフォーリンスクール（韓国）、カナディアンアカデミー（神戸）、千里国際学園（大阪）

千里国際学園のスポーツ・音楽のチームは千里国際学園中等部・高等部(SIS)と大阪インターナショナルスクール(OIS)の2校合同で編成しており、APACの公式試合・行事や、近隣のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合・行事等に参加しています。

(注) 「セイパース(The Sabers)」は千里国際学園スポーツチームの愛称です。

<総合科目> 実習報告「現代文明を見つめなおす」

平井太佳子

保健体育科

「無人島やって」「米と味噌だけってホント?」「島まで泳いで渡るらしい」という噂が飛び交ったのは今年の秋。その実態は「現代文明をみつめなおす」という授業で、便利な現代の生活をちょっと立ち止まって振り返ってみよう、という「総合学習」のことだった。

普段の生活の中で、道具や機械を便利に使いこなしているつもりが、実は道具や機械に振りまわされているのではないだろうか? 本当に必要なものなのだろうか、そんな道具や機械がなかったらどんな生活になるのだろうか?

それなら「無人島」で道具や機械に頼らず暮らしてみよう。現代文明の象徴、時計とケータイから離れて。

冬学期の間行われた週2回の授業では、「生きていくこととは」という具体的な健康の維持管理、衛生管理の講義、火起こしやご飯を炊くという実習、文学をひもとく漂流や遭難を生き延びた人々の手記に学び、孔子の時代にすでに「機械に使われるとは困ったものよ」と文明を嘆いていることを知り、気象、天文、海洋、燃焼など科学的知識を得、そして自らがどのくらい文明の利器に頼らずに暮らすことができるか、ということを考えていった。

そしてついに、3月17日、徳島県阿南のYMCA海洋センターの所有する無人島「野々島」での生活が始まった。

小型ボートで波を全身に浴びながら島へ渡り、荷物を抱えて山を越えようやくたどり着いたのは小さな広場。とりあえず簡易テントを張り寝る場所を確保しなければならない。日は次第に傾き山の向こうに消え、徐々に夕闇が迫る。ああ、今から水もくみに行かないきゃいけない。どうにか落ち着いた頃にはすっかり日は暮れ、薄暗いなかパンやおにぎりをかじる。海から吹き付ける北風が冷たい。

火を起こせば暖も取れるし温かいものも飲めるのに、火がつかない。

「あ、ついた!」と思ったら新聞紙だけ燃えて消えてしまう、何度も繰り返してようやく火がついた。自分の火。遅い夕食を始める。満月が上り浜を照らす。月明かりはこんなに明るかったのか。

寒さに震えた夜。寝袋も毛布もあるのに、テントの中なのになんでこんなに寒い。縮こまって寝てコチコチになった体が痛い。

まずは薪を拾わなければいけない。火をつけて、朝ご飯を食べよう。明るいと随分と作業がしやすい。昨日の夜よりずっと手際がよくなる。何を食べよう。持ってきた食材を眺める余裕もある。献立も考えられる。自分で作るとおコゲも美味しい。上手にできたら誰かに分けてあげたい。

おなか一杯になったら落ち着いた。釣りに行こうか、テントをもう一度ちゃんと張りなおして寝やすくしようか、かまどを使いやすいように作り直そうか、島には食べられそうなものはないのか探してみようか。やりたいこと、やらなくちゃいけないことが随分とある。

浜は打ち上げられたゴミが一杯。魚網の切れ端、ブイ、ペットボトル、発泡スチロールの箱、洗面器、みんな海の向こうで出たゴミ。川を流れ、海に捨てられ、置き去りにされたもの。ペットボトルを束ねる。イスの出来上がり。木箱は食料を入れておくのに便利。ゴミの山は宝の山。

今は何時なんだろう。島に来るときのルールで時計は置いてきた。太陽を見上げる、昼頃なのかな。暗くなる前に夜のために薪を用意しなくちゃ行けないし、晩御飯も食べてしまいたい。時間がわからないのって気になる。

二日目の夜は初日よりもっと寒かった。せっかくテントも快適なようにしたつもりだったのに、ほとんど眠れなかった。しんどい。火をつける。食事を作る。食べる。カニが取れるらしい。その辺に生えているのは大根で食べられるらしい。潮が引いたら貝や

カメノテ?とかいうのも取れるらしい。

大根の葉っぱが結構美味しい。カニのから揚げ拔群。貝の炊き込み御飯に挑戦。

お腹が膨れたら眠い。夜寒くて眠れなかったから眠くて仕方ない。テントにもぐり込む。さすがに昼間のテントは暖かい。お昼寝最高!

お腹がすいたら食べる。食べて眠くなったら寝る。寝て起きて暇だったらボーッとする。誰にも文句は言われない。水を汲んだり、薪を拾ったりしなくちゃいけないこともあるけれど、自分のペースですれば良い。時間を気にすることはない。時計がないって楽チン。

なんかたいへんだったけど、今夜で島の生活も最後なんだな。名残惜しくてなかなか寝る気にならぬ。

島を去る日、快晴。張りきってさっさと片付けたけど、迎える船はまだまだ来ない。浜に寝転ぶ。昨日まで吹き付けていた北風が弱まって今日は心地よい。空が広い。ビルも電柱も何も遮る物がない。いつも時間がなくて忙しいのに、ここではこんなに時間を持て余す。この時間を持って帰って、忙しいときに使えれば良いのに。

山を越え、船着場に戻る。島を離れる。もう薪拾いをしなくても、ススだらけにならなくても良い。お風呂に入れるし、メールのチェックもできる。ずっとこんな暮らしをするのは無理。でも、ちょっと名残惜しい。

お風呂に入ってさっぱり。眩しいほど明るい食堂。ケータイのメールチェックも完了。腕時計も戻ってきた。手首に巻いた。手錠みたい。

【野々島語録】

自分の時間というか自分に適した時間感みたいのものが失われてきていると思う。

今のモノは、あれが要る、はい、これがあるみたいな感じだが、うまくあ

(次ページ★に続く)

<総合科目> 「知の探検隊」が探し当てたもの

真砂和典
理科

去年の4月から全国的に中学校の課程で高校に先行して総合学習が始まった。本校の授業はもともと総合学習を目指す“生徒の主体的な取り組み”を開校以来強く意識してきたので今更ということはないが、ちょうどこれを機にと7年生で始めたのが「知の探検隊」という授業だ。この1年に渡る取り組みをここに紹介しよう。

この授業の核となるものはすでに8, 9年前から「科学者プロジェクト」としてはじまっていた。司書教諭の青山さんと理科の田中さんが練り上げたものだ。図書館を最大限に活用して資料を集め、科学者に関するレポートをまとめる。最後にその科学者になりきって、自分の人生や仕事についてみんなの前で発表して質問まで受ける。科学者になりきるために扮装したり、実験装置や模型まで作ってきたりした生徒もいる。卒業しても忘れない印象に残る授業のひとつだ。この時に調べたことから自分の進学のテーマを見出したという話をつい最近も聞いた。特に大切にしてきたのは生徒が自分自身でプロセスをじっくりとたどれるようにすることだ。単に、自分で調べろと、図書館で生徒を放すのではない。たぶん多くの総合学習がここで躓いている。図書、雑誌、事典類の見つけ方から始まり、文献リスト作り、資

料からレポートにまとめるための情報カード作りまで生徒とともに動き回り、10人を切る数の生徒にひとりの教員がついてこまめにチェックをした。

去年の春学期はひとりがひとつの「都道府県」を担当してポスターを作った。30枚以上の情報カードを項目ごとにまとめてレイアウトを決め、書いたポスターを貼って、暑い6月の玄関で汗を流しながらポスターセッションを開いた。平行して進めていたコンピュータの授業ではタイピングから始めて、一通りの基礎を終えていた。

秋学期には資料にあたりながらレポートにまとめる人物を慎重に絞り込んでいった。図書、雑誌、事典類で10冊以上を集めて文献リストを作った。更に、その頃には全員が使えるようになっていたインターネットも資料集めに活用した。これらの資料からいきなりレポートを書き始めるのではなく、やはりここでも使えそうなものをまず情報カードにするというプロセスを踏んだ。そうすることによって、情報の取捨選択を吟味し、構成を考えさせるように仕向けた。最後には正式なレポートの形に整えて10ページを超える大作が完成した。

このレポートの内容をみんなの前で発表するのが冬学期の「知の探検隊」が向かう最終目的地だ。発表とあって

も、秋学期にコンピュータの授業で学んだパワーポイントを駆使するという大人顔負けの大きかりなものだ。レポートの文章をフローチャートにしてスライドショーを構成するのは、教師の側で予想していた以上に、内容をまとめて理解を深める勉強になった。そして、会議室や時にはシアターまで使用して、学年の仲間と時間を割いて見に来て下さった保護者や教員の方々の前で、生徒達は堂々とプレゼンテーションをやったのけた。

数名の担当教員で毎週会議を持ちながら「学び方を学ぶ」という究極の目標を立てて取り組んだ1年がこうして終わった。慣れないこともあって苦労も多かったが、生徒の様子を見てみると随分成長したなど実感できる。本校で積極的に取り入れているアンスケジュールタイム（授業のない時間）を有効に使う助けになるとしたら、これも重要な懸案に着手できたことになる。8年生が獲得した技術と自信をこれからの学習にしっかりいかしてほしい。その学習環境を提供するのは教員側のこれからの課題となるだろう。

<追記> この4月には8年生が先輩として、入学してきた7年生に向けてもう一度プレゼンテーションを行った。さあ、7年生のみなさん、今度はあなた達の番ですよ!!

(前ページ★の続き)

るモノを利用するのが力だ。

今、身の回りにある全ての物が楽をさせてくれている。

時間がわからなくなることで現代文明から離れた感じがした。

メールだけでなく、時間を見るのまですべて携帯を使っていた自分に気がついた。

文明は時に人を快適にして、時に人を憂鬱にさせる。

海をぼ～っと見ていることが何よりの幸せでした。

電気や石油やらが人の代わりにするようになって、じゃあ人間には何が残るのだろう？

「現代文明」は、確かに私たちの生活を楽にしてくれますが、同時に、人間を人間らしくない姿に変えていっているような。

神様に感謝します。

自分で考えて料理できた、ということでおなかいっぱいおいしさを心から感じた。

現代文明はあっても良いがなくても

良いというようなあいまいな存在になってきたと思う。

現代文明は私達に「責任」取らせなく、甘やかしている様にも感じました。

持っている知識、食材、道具を駆使して調理にかかった。すごくおいしくできて大満足。

とにかくチャレンジしてみて、失敗してもちっとも平気だった自分がいました。

<数学科> 数学講読の授業から

馬場博史
数学科

冬学期に数学の教養科目「数学講読」を開講しました。この科目は、興味のある数学の話題を各自で決め、それについて易しい本を読んだり、インターネットで調べたりしてレポートするというもので、新課程からは総合科目のひとつになります。

円周率は、新学習指導要領小学校算数によると、「3.14を用いるが、目的に応じて3を用いて処理できるよう配慮するものとする。」とあります。一方、2002年12月には東大の教授を中心とするグループにより小数点以下1兆2411億桁まで計算されたことが発表されました。

今中由花子さん(高3)は「円周率 $\pi=3$ の不合理」について調べ、次のような考察をしました。「円に内接する正多角形の面積は円の面積より小さいはずで、ところが $\pi=3$ で計算すると、正多角形の面積が $n=13$ では円の面積より大きくなってしまいます。ちなみに π を3.1とすると、 $n=23$ で正多角形の面積が円の面積を越えます。さらに、 $\pi=3.14$ とすると、正114角形で円の面積を越えます。よって、ある程度数学的厳密性を求めるのなら、 π をせめて3.14と評価すべきなのです。」

(引用資料 <http://www1.odn.ne.jp/kentaurus/whypai.htm>)

友金未沙さん(高3)は、円周率計算の歴史を調べ、こう感想を述べました。「今まで何の疑問もなく使っていた3.14という数字。その歴史について調べてみて、コンピューターのない時代の人は次の1桁を発見するためにどんな多くの人々が関わり、そして苦労したかを知ってびっくりしました。円周率の歴史を調べていくうちに、生涯円周率を求めつづけた人がいたことや、せっかく計算したのに途中から計算ミスがあった人もいたなど数学が嫌いな私でも興味を持てる話題もあって面白かったです。これから円周率がど

こまで発見されていくのか楽しみです。」

(引用資料 http://www.zakzak.co.jp/top/t-2002_12/3t2002120628.html)

方程式解法の歴史もおもしろい話です。2次方程式の解の公式はギリシャの時代のころから知られていましたが、3次方程式と4次方程式の解の公式は16世紀にイタリアで発見されました。その後5次方程式も同じように解の公式があるものと思われていましたが、1824年に「5次以上の一般の方程式は解くことはできない」ことがノルウェーのアーベルによって証明されました。彼は当時22才でしたが、その後27才の若さで亡くなっています。さらにその後「5次以上の方程式が解けるための必要十分条件」について解答を与えたのがこれまた21才という若さで決闘で死んだフランス人のガロアでした。

このことを調べた溝口絢子さん(高2)は「紹介した数学者には共通点がないように思われますが、彼らは私たちから見て悲劇の人生を送っています。裏切られたり、早く死んでしまったり、色々あります。でもだからこそ天才でも人間であることが分かるし、私たちと一緒にんだという親近感をもてるのではないのでしょうか。彼らの人生が完璧すぎたら逆に彼らはこれほど有名になっていなかったと思います。数学はすごく奥深くて人間のドラマが色々隠されているのだと思いました。」と述べています。

(引用資料 <http://www.goukaku.co.jp/math.html>)

「人間は考える葦である」という言葉を残したパスカルは、数学では「パスカルの三角形」と円錐曲線の「パスカルの定理」が有名です。「パスカルの三角形」は数字がある規則で三角形に並んでいて、これから $(a+b)^n$ の展開式の係数を簡単に求められるというものです。パスカルは31才のときに瀕死

の事故に遭い、助かったのは神のお蔭と考え、学問をやめて修道院に住みこみ、一生をそこで送りました。

彼の生涯について興味を持った浅沼花菜さん(高3)は、次のような感想を書いてくれました。「もしパスカルがまだ生きていたら数学の面白さを聞いてみたいです。それから、パスカルのたくさんのすばらしい業績を見て、やっぱり勉強は無理やりさせられるのではなくて自分から好きになってやった方が、すばらしいものを残せるのかなぁと思いました。私も何か一つのことに集中して、がんばってみたいくなりました!」

(引用資料 <http://contest.thinkquest.gr.jp/tqj2001/40466/suugaku.html>)

本校は、1998年度より、それまでの4学期制から各学期同授業日数の3学期制(60日×3)へと移行しました。4月～6月を春学期、9月～11月を秋学期、12月～3月を冬学期と呼んでいます。

また1999年度には、大阪国際文化中学校・高等学校(OIA)から千里国際学園中等部・高等部(SIS)へ校名変更。同時に、中3以上の授業は一部を除いて「学期完結制」となり、高等部では学期ごとに単位が認定されるようになりました。このため、各学期で履修科目、時間割が変わります。

理科部春の合宿

堀池奈未
高等部2年

3月の16日、私たち理科部は11時間もの間バスに揺られ、更に4時間荒波（??）にもまれ海を渡り、屋久島に行きました。今考えるとぞっとするほど気の長い旅だったように思いますが、自然の豊かさで有名な屋久島に行くということで部員たちも楽しんでいましたように思います。私がこの合宿で一番したかった事とは、星空を見えるということでした。日頃、プラネタリウムという人工の星空で星の位置や星座を覚えていると、いざ実際の星空で！と空を見上げると、いつもと違う距離感覚に苛まれてよくわからない、ということがよくあります。プラネタリウムではわからない実際の星空の美しさや、もちろん星座や星雲を自分の目で確かめて見ることができたらと思い、空気の澄んだ大自然の屋久島に目的地を決めました。

現地に着いてからは、大川（おおこ）の滝、千尋（せんびろ「千と千尋の神隠し」のネーミングはここから来

ているそうです）の滝、トローキの滝などの滝や、縄文杉や屋久杉ランド（ランドといってもテーマパークという感じではなく、むしろ山登りと言った方が正確だと思います）などの観光にも行きました。何千もの間生きた木をながめていると、過去を見ているような不思議な感覚にとらわれました。ちなみに、「屋久杉」というのは、樹齢千年以上の杉のことを言います。屋久島では、わざわざ観光地に行かなくても家の周りに入るだけで珍しい植物や、屋久島だけにしかない固有種の植物を見ることが出来ます。屋久島には九州最高峰の宮之浦岳（1935m）をはじめ1000メートルを超す山々が46座もあり、そのような標高の高さと亜熱帯林とで、春の屋久島では冬の生物と夏の生物が両方いっぺんに見られるということでした。生物の専門知識があまりない私にはよくわから



なかったというのが正直なところですが、ヤシの実や椿、ツツジ、菜の花畑やガジュマルといううねうねと枝をのばして多種の木にまきついている木など、南国や春を感じさせる植物がのびのびと生きていて、大阪の植物のなさや自然の少なさをかえって実感しました。また、火山の噴火によってできた島だけあってさまざまな種類の火成岩を確認することができました。星については、悪天候によって思った以上に見えなかったというのがありますが、望遠鏡などを使って木星やその周りにある4大衛星、土星などを観測することができました。個人的な感想ですが、4大衛星が前日と違う位置に移動して見えたのが、宇宙の大きさを実感

（次ページに続く）

校外学習で吹きガラス体験

新見真人
理科・化学担当

毎秋学期に理科、特に化学の無機化学分野の学習で鉛ガラスを化学実験室で作っています。

そこでは、るつぼの中に鉄製の乳鉢でよく混合したケイ砂（二酸化ケイ素）と酸化鉛（II）とホウ酸ナトリウムさらに消色剤（透明ガラス）または種々の金属化合物（色ガラス）を加えます。このるつぼを三脚上のマッフルの中に入れ、ガスバーナーの火力を最大にして加熱融解します。ただ、この方法ではちょうどおはじきくらいの大きさのガラスをつくるのが精一杯です。また、るつぼ内の融けたガラスを陶板上に流しだしたあと、ゆっくり冷却させることもむずかしく、せっかくできたおはじきも大抵粉々に割れてしまいます。そこで、これらの欲求不満解消のため、校外に出かけました。（2月16日、日曜日）。和泉市郊外の



ガラススタジオで、高等部11年生（現12年生）12名の生徒たちが実際に吹きガラス体験をさせてもらい、ペーパーウエイトとガラスをそれぞれ一つずつ製作しました。どれも個性がよく現れたガラス作品が出来上がりました。当日のスタジオスタッフの方々のご丁寧な指導に生徒たちのガラスに対する興味が深まったことと思います。また、スクールバスの運転手さんにも毎回郊外学習で大変お世話になっています。どうもありがとうございました。

させてくれてとても印象に残っています。

この合宿で部員たちの得たものは大きかったと思います。今までにプラネタリウムで主に活動してきた理科部ですが、この合宿をきっかけに皆の興味の対象がそれ以外の分野にも広がって見つかり、部員1人1人が自分の本当にしたいことを見つける大きな第一歩になったと確信しています。今回SIS事務長の下村啓三さんのお宅に部員一同泊まらせて頂いたのですが、この場を借りて改めてありがたいです。下村さんのお力添えなくしてはこの素晴らしい合宿を無事に終えることも、もちろん始めることもできなかったわけですから。本当に感謝しています。また、一週間わたしたちの面倒を見てくださった顧問の新見先生、ありがとうございました。

ここに部員の皆の感想を載せたいと思います。

池永真央 (高等部2年)

屋久島は自然がたくさんあって行くだけで勉強になった。どのような植物があるのか、この海や山はなんというのか。地元の人などにも聞いたりして、マメ知識が増えた気がする。今までの理科部はプラネタリウムでの活動が主だったけど、この屋久島でも合宿で、生物などの他の分野にも触れられた気がする。

松村実果 (高等部2年)

屋久島に来てみて、大自然を体感して、何より理科部の今後の道が少し見えてきたようでよかった。初めて天体望遠鏡を習って楽しさがわかったが、影ができるほど明るい月と悪天候により見えた星座や星達は大阪とあまり変わらないもので、自己最高の星空の思い出にならなかった。これがとても残念で仕方がないです。

時政令雄 (高等部2年)

屋久島は大阪では見ることでできない景色、感じることでできない自然を見ることができた。特に強く感じたのは「月の明るさ」。普段大阪で見ている月に比べてとても大きく自分の影がはっきりとでるくらい明るいものでした。しかし、ただ自然が綺麗とかではなく、この合宿に参加して何故それはそうなるのか、何故きれいなのかとい

うことを考えることができたと思う。地元の人達、バスの運転手、露天風呂で知りあったおじさん達などに、マメ知識なども教えてもらったりと、満喫できたと思う。楽しく、いい旅行でした。

辻 健三 (高等部2年)

草や花など生物に関わりのあることを多く学びました。景色がきれいで感動することができました。山の自然さ、川のきれいさなど屋久島は充実できる場所でした。一番の目的は天体観測だったと思います。天候の悪さなどがあったけど、私にとってすごく勉強になりました。また、星などを探して見つけたりすることが快感や楽しさになりました。

新見真史 (高等部2年)

この合宿では都会では見れないものをたくさん見ることができました。屋久杉やガジュマルといった木や滝など島特有のものと思われるものが多く、とても魅力的でした。屋久島といえば屋久杉、中には樹齢7200年といわれるものもあり、噂どうり素晴らしいものです。年間一万mmを超える雨が、屋久杉と呼ばれるほどまで大きくしたのでしょうか？標高500m以上にあり、樹齢千年を越えたものでないと屋久杉とは呼ばれません。そんな木が多く残っているのは日本では少ないでしょう。これからも保存していくべきだと思います。

酒井春奈 (高等部2年)

屋久島は本州とはやはり違う雰囲気、草木などの一つ一つの色が濃いような感じがしました。どこに行っても自然が多くて、大阪では味わえないのどこかで気持ち良い空気をたくさん吸うことができたと思います。星は満月だったので明るすぎてあまり見えなかったり、くもったりして残念でしたが、その他にも貴重な体験ができたので本当に良かったと思いました。合宿では、理科部として一歩前進できたので、自然を体験しただけで終わらなくて良かったと思いました。この屋久島での合宿でこれから理科部が大きく成長すると良いな、と思います。

溝口智明 (中等部3年)

もっと大きい町があると思ったら港から見える建物は、本当に少なかっ

た。でも島にいた時間が本当に短く感じた。山の中の滝、近く、海、屋久杉などの自然がいっぱい、やりたいことがいっぱいですぐに疲れた。夜の天体観測で今まで見たことのない星がいっぱい。また、きたいな屋久島。

神田脩太 (中等部3年)

最初は中途半端な気持ちで来てしまったけれど、現地に来て下村さんの話を聞いたりして、理科部の事に対してもっとまじめに取り組むことを改めて考えることができた合宿になりました。

真砂健人 (中等部3年)

出発前は「屋久島よりもっと良い場所があるんじゃないか。」と思っていたけど、着いてからは「大阪には帰りたくない」と思うほど良い場所でした。山では見たことのない大きさをしている屋久杉や猿・鹿を見たり、海では石を拾ったり、魚を捕まえたり、夕日を見たりもしました。そして、バスの運転手さんと温泉にいた下村さんの友達、一週間行動を共にした新見先生、下村さん、部員の皆に世話をしてもらいました。屋久島の合宿は人、動物、山、海などたくさんの物のおかげでとても楽しくなりました。

三浦伊織 (中等部2年)

出発前は合宿ってどんなのか全く予想できずとても心配でした。でもちゃんと生活ができたのでほっとしました。一番楽しかったことは、海に行ったことや露天風呂に入れたことです。今は本当に来てよかったと思います。



新入生の皆さん！特に新7年生みんな、只今部員募集中です。理科が大好きな人はもちろん、あんまり好きじゃなくても理科がちょっとくらいは好きになること間違いなし！何よりもフレンドリーな部員が多いので楽しめるといのが一番の売りです。とにかく興味のある人は11年1組堀池までいつでもどこでも話しかけてください。待ってます。メールはnamily7@hcn.zaq.ne.jpまでどうぞ。

また、今度理科部連絡用の掲示板を設定したのでそこに書き込んでくれても結構です！アドレス→http://bbs3.otd.co.jp/309315/bbs_plain

<ボランティアクラブ> GNS近況報告

徳嶺友香
高等部3年

まず、インターナショナルフェアでの募金活動の報告をさせていただきます。

私達GNSは、昨年のインターナショナルフェアでバリ島爆弾テロ(2002.10.12.)への救済金を募りました。その結果、皆様の御好意で集まった25,000円は、直接、部員(斎藤美葉子)の手によってバリ日本人会に届けられました。義捐金は以下の事に役立てて頂いたそうです。

＊被害にあわれた方々が入院されている病院への寄付。

バリの医療機関は日本に比べて設備等で不備不足があるそうなので、少しでも役立てばということだそうです。

＊合同慰霊祭への寄付。

爆弾テロでなくなられた方々を慰霊するためにバリで行われたそうです。

＊バリ人犠牲者遺族へのお見舞い金。202人の死者のうち身元が確認できたバ

リ人犠牲者は31人で、外国人被害者数に比べると少数ではあったが、バリ人遺族は経済的に苦しい方々がほとんどで、日本人会としては犠牲者31人全員の遺族にお見舞金を手渡すことにしたそうです。現在、犠牲者16人の遺族の方々に手渡すことができ、涙を流して喜んで下さった遺族もおられたとのこと。

以下、バリ日本人会から千里国際学園の皆様へということでメッセージが届いています。

『募金自体もちろんありがたいですが、学生のみなさんのがんばりや、また、犠牲者の方々のために募金活動をしてくれたことをとても嬉しく思います。募金は責任を持って有効に使わせて頂きます。』

『バリは前向きに動き出しています。』



バリ日本人会HP <http://www.japanclubbali.org/main.html>

因みに、只今GNSにも世代交代の波が訪れつつあり、各学年生のそれぞれの思いも個性的で、どのようにクラブとして発展していくかはわかりませんが、活気いっぱいのGNSです。

現在、中国の学校に文房具類を送るプロジェクトを進行中!!

<軽音楽クラブ> Club Aid 活動報告 Splash Power Stage 2003

深田充宏
高等部1年

2003年2月8日(土)、箕面市らいとぴあ21にて箕面市教育委員会子ども課主催によるSplash Power Stage 2003が開催されました。これは「中高生による中高生のためのステージ」をスローガンに、箕面市教育委員会子ども課の今峰秀樹さんをリーダーに箕面市の学校に通う中高生、箕面市在住の中高生が一体となって音楽・ダンス・漫才といった文化を媒介として交流の機会を設け、互いの感性に磨きをかけました。千里国際学園からは諸正義彦君が音響ディレクター、深田が照明ディレクターとして、10年生のLATINOと11年生のAIRHEADが演奏グループとして参加しました。また卒業生の岡田拓人さんも参加しました。学校という枠

を超えて、互いの音楽性を知ることができたのは大きな成果でした。

僕は去年の9月からそのライブの企画や準備、当日のスタッフをする実行委員会委員として活動を開始しました。Splash Power Liveの本番が終わってからもう2ヶ月もたちます。でも、よっぽど楽しか?せいか、つい最近のことに感じます。ミーティングは学校の帰り、皆疲れた状態で集まらなくてはなりませんでした。学校の違いや先輩も後輩も関係なしに意見を出し合いました。実行委員のミーティングが始まってから準備をしていた間はとても時間が長かったように感じましたが、今思うとすごく短かったような気がします。僕がこのイベントの実行委員に

参加したのは、ただ先生に頼まれたからでした。最初は「めんどくさいな...」とか思っていたけど、どんどんミーティングを重ねるうちに、楽しくなってきて、やりがいのある仕事だと思い始めました。そして最後には今まで味わったことのないような達成感が生まれました。また、こんなイベントがあれば実行委員に入りたいと思います。いろんなことを含めて、このイベントの実行委員に入って良かったと思います。

トライアスロン強化指定選手に認定

馬場博史

トライアスロンクラブ・ランニングクラブ顧問、数学科

■日本トライアスロン連合公認認定記録会

永田悠太君(SIS9)が、3月16日(日)に開催されたJTU(日本トライアスロン連合)公認認定記録会で、規定の記録を突破し、強化指定選手に認定されました。記録は、スイムが400m4分54秒、ランが1500m4分53秒でした。おめでとうございます。



永田悠太君

■武庫リバースポーツフェスタ

3月9日(日)10kmマラソンで新見まゆ子さん(SIS9)が4位に入賞しました。＜他の完走者＞藤本卓、松田杏子(SIS12)、上岸宏、馬場博史(Faculty)

■第1回大阪陸上競技記録会中学生の部

4月12日(土)万博競技場で行われ、男子2名が参加し

3000mで好成績を残しました。＜記録＞永田悠太(SIS9)10分21秒、花光照宗(SIS8)10分32秒

■武庫川ロード記録会

4月13日(日)武庫川河川敷公園で行なわれ、4名が完走しました。＜結果＞5km女子2位長みさき(SIS卒)3位新見まゆ子(SIS9)男子3位永田悠太(SIS9)10km男子6位馬場博史(教員)

■吹田市長杯陸上競技大会

4月20日(日)吹田市総合運動場で行われ、SIS9年の永田悠太君が3000mで公式大会での学園記録を更新しました。＜記録＞3000m永田悠太(SIS9)10分16秒、長みさき(SIS卒)13分08秒、1500m花光照宗(SIS8)5分04秒、奥村悠(SIS9)5分35秒

高槻ジャズストリートに出演

福島浩介

国語科トランペット

今年も昨年同様、高槻Jazz Streetに出演をします。高槻Jazz Streetとは、毎年5月に大阪府高槻市にて全会場入場無料で行われる日本最大級の音楽のお祭りです。このイベントは「街を音楽であふれさせ、明るく楽しい街にしよう」という趣旨のもとに集まった市民ボランティア団体「高槻ジャズストリート実行委員会」によって企画・運営されています。

「第5回高槻ジャズストリートについて」

開催予定日：2003年5月3日(土)、5月4日(日)

予定会場：大阪府高槻市(阪急高槻駅周辺)

出演予定：秋吉敏子(pf)、日野テルマサ(tp)バンド、ハリー・アレン(sax)、ハワード・アルデン(g)、古谷充(sax)、岸ミツアキ(pf)、多田誠司(as)、金澤英明(b)、藤山E.T.英一朗(dr)、川嶋哲郎(sax)、石井彰(pf)、安ヶ川大樹(b)、山北健一(dr)、中村真(pf)、吉岡大輔(dr)、古谷光広(sax)、小柳淳子(vo)ほか国内外のミュージシャン200組以上1000名以上が参加予定(順不同敬称略)

昨年度冬学期のJazz Class履修者+助っ人で出演する予定です。5/3午後3時より、阪急高槻市駅前噴水前広場のステージです。詳しいことは、<http://www.0726.com/jazz/>に、「高槻Jazz Street」のウェブ・ページがありますので、覗いてみてください。

学校説明会

初回は5月21日に開催します

アドミッションズ オフィス

本年度の学校説明会の日程が決まりました。お知らせの方にお知らせ下さい。

第1回 5月21日(水) 13:30

学園紹介、懇談会

第2回 6月14日(土) 10:00

オープンキャンパス形式

第3回 9月25日(木) 13:30

本校の英語教育を主題に

第4回 10月18日(土) 10:00

オープンキャンパス形式

第5回 11月15日(土) 10:00

選考方法/要項内容等の包括的説明

Academic Success

Karin Caffin

OIS Head

In March, administrators attended an IB meeting at Yokohama International School. The Director of the Asia Pacific Region, Dr. Helen Drennan, was at the meeting and updated us on developments in the region and around the world. Worldwide there are 1650 schools in 108 countries that offer the Diploma Program, the PYP and the MYP. All three IB programs are being adopted by national education systems in many countries around the world. In the Asia Pacific region, 100 schools offer the Diploma Program, 40 the MYP and 30 the PYP. The IB Organization has been updating its publications and many of them are available on the IBO web-site, and I encourage you to visit the site at www.ibo.org

At the meeting we discussed one issue that all international schools in Japan encounter, that of the level of English of our students. It seems that we all have problems with controlling the amount of Japanese that is spoken on campus. On one hand we celebrate the fact that our students know both Japanese and English, but on the other hand, we despair because Japanese becomes the dominant and preferred language and this is detrimental to academic performance. Our biggest challenge at school is how to monitor and control what language the students use. Even though we have an 'English only' policy in classrooms, this can be difficult to enforce, especially when we have students who do not seem to be able to, or want to, take seriously the academic mission of our

school.

During the last few weeks we have been busy screening new student applicants to our school. This screening consists of parent and student interviews, student background checks, testing and classroom tryouts for ECP children. We have accepted some and turned others away. When we turn students away, the decision is not made lightly. After the hours of testing, interviews and discussion, the admissions committee may have to refuse entry because of a number of reasons, such as test results, academic history, social readiness, English ability and potential academic success. Sometimes we admit students because we believe that they have the potential to succeed, and sometimes we are right, but other times we are not. If we allow students to move through elementary and middle school without having them take seriously the need to master the English language or the need to understand academic rigor, then we are not helping these students. They will find it extremely difficult to succeed in our high school program. There are some students who find academic work difficult, but they are motivated, and supported at home, and work really hard and are able to achieve a measure of success in our school. If students are not prepared to work, they are wasting their own time, teacher and class time, and the fees their parents have paid. We face a dilemma at all stages of schooling when we have to ask students to withdraw, especially when they end up 'between languages', that is not being strong enough in English or Japanese to succeed in either system. Because of this we try to counsel parents carefully when they apply to our school, and we try to keep parents informed about their child's progress. We do need parent support, with homework 'monitoring', ensuring that students get enough sleep and helping their children understand that school is a place where academic work is an expectation. We appreciate the many parents who do support their children. Our PYP and MYP curriculum teaches our students to learn how to learn, to develop

higher order thinking skills and to do research, but we need the students to take on board the fact that they are here to learn and make an effort to succeed. I would like to ask that parents remind their children about the use of English at school. I thank the parents who do take time to read the Educator, and who support their children.

MIDDLE/HIGH SCHOOL UPDATE

Gwyn Underwood

OIS Middle and High School Principal

During the last week of February, I was invited to visit an international school in Tokyo to serve as a member of a WASC visiting committee. The WASC visiting committees go to all member schools every 3 years to validate their program and give accreditation to schools that pass certain criteria.

What is WASC?

The Western Association of Schools and Colleges (WASC) is one of six non-profit US based regional associations that accredit public and private schools in the US, Pacific and Asia. It was formed in 1962, and accredits education institutions.

What does accreditation mean and why do it?

Accreditation is a voluntary process for international schools, and is ultimately a means a school uses to develop and maintain a verifiable high quality of education. That is, in addition to proving a school has met established criteria or standards and is achieving its own stated objectives, the process helps to provide a framework for schools to self evaluate and develop improvement plans.

How does WASC accredit a school?

A school is evaluated on the degree to which it is accomplishing its purposes and functions, and on the appropriateness of those purposes and functions for an institution of its type. To qualify for accreditation, a school must give evidence of adequately meeting the following criteria:

1. Organization for Student Learning:

千里国際学園中等部・高等部 (SIS)ではこの広報誌"インターカルチャ"が発行されていますが、併設の大阪インターナショナルスクール(OIS)では毎週金曜日に"Educator"が発行されています。

ここでは"Educator"の記事の中で、OISの様子がよく分かるものやSISと関連する話題等をセレクトして掲載しています。

School Purpose, Governance, School Leadership, Staff, School Environment, Report Student Progress, School Improvement Process

2. Curriculum and Instruction: What Students Learn, How Students Learn, How Assessment is Used

3. Support for Student Personal and Academic Growth: Student Connectedness, Parent/Community Involvement

4. Resource Management and Development: Resources, Resource Planning

After an accreditation visit, the visiting committee writes up recommendations for the school to address in their action plans, and then follows up on these recommendations in the mid-term visit. At OIS, we have a SIP (School Improvement Process) that acts as our action plan, a WASC coordinator (Mr. Searle) to coordinate the process and a SIP committee to help address these areas with the faculty and stakeholders. Please look at <http://www.acswasc.org/> for more details about WASC. We will be getting more information to regarding this visit you later on this year.

Elementary Update

Rod Adam

OIS Elementary School Principal

Boys Will Be Boys!

"What's the matter with my son?"
"Why is he an underachiever in school?"
"Why are boys so violent?" "Why won't boys talk to adults?"

Educators and parents are engaged in discussions about the way we raise and educate boys. Statistics point to an alarming number of young boys, especially, at high risk for suicide, alcohol and drug abuse, violence, and loneliness. They are four times more likely than girls to be sent to a school psychologist; they are diagnosed with 60 - 80% of learning disorders. Their areas of strength, physical activity and visual-spatial perception, are not as important as verbal skills in the

feminine, quiet, word-dominated environment of schools. Because boys do not do as well in school as girls, from elementary school through college, they are at risk for concluding that schools don't work for them and becoming withdrawn and bitter.

During Spring Break four elementary faculty members, including myself, attended a dynamic 2-day workshop with Dr. Michael Thompson, a consultant, author and psychologist specializing in children and families. Dr. Thompson was a clinical instructor in Psychiatry at the Harvard Medical School and has been a consultant to more than two hundred schools across the United States. He is a co-author of the New York Times best-selling book *Raising Cain: Protecting the Emotional Life of Boys* (Ballantine Books, 1999).

In *Raising Cain*, the authors identify the social and emotional challenges that boys encounter in school which leave them hurting - sad, afraid, angry and silent. As educators and parents, we are urged to nurture and protect the emotional lives of boys in these seven ways:

1. Give boys permission to have an internal life, approval for the full range of emotions, and help in developing an emotional vocabulary so that they may better understand themselves and communicate more effectively with others.
2. Recognize and accept the high activity level of boys and give them safe boy places to express it.
3. Talk to boys in their language - in a way that honors their pride and their masculinity. Be direct with them; use them as consultants and problem solvers.
4. Teach boys that emotional courage is courage, and that courage and empathy are the sources of real strength in life.
5. Use discipline to build character and conscience, not enemies.
6. Model a manhood of emotional attachment.
7. Teach boys that there are many ways to be a man.

Please contact me if you would like a 2-page description of these seven points, or if

you would like to borrow a copy of the book *Raising Cain*.

Rewards versus Recognition

Stickers, trophies, prizes, points, tokens, grades - all are forms of rewards that teachers used when we went to school. But do such premiums work?

In the 1970s a movement began when coaches and physical educators began to express their discomfort with the negative effects of organized sports and high-level competition for young children. Classroom teachers shared their concern and began to research effects of educational practices on the development of both negative and positive self-esteem. During the past 15 years, we were influenced by growing bodies of knowledge about the processes of learning. Information about constructivist learning theory, multiple intelligence, the conditions for learning, and brain-based teaching influenced our classroom organization and management. We became increasingly aware that, while educational practices such as awards and rewards may have served a purpose at one time, these same practices no longer seemed useful or wise.

Research confirms what we had learned. Rewards can hinder students from developing a positive self esteem, working successfully with others, taking risks and taking responsibility. Above all, rewards interfere with learning.

At OIS elementary school, we know that students, like others, need to be acknowledged for whom they are and what they achieve. Teachers work with students to plan opportunities for recognition. The word recognition, based on the Latin root *cognoscere*, "to know," is defined as "to notice". We try to validate, acknowledge, honor, and support student learning. Recognition might include:

- * partners giving each other specific feedback on a project
- * students keeping personal records of the books they have read
- * teachers providing specific feedback on student projects
- * students collecting and presenting portfolios to parents

保護者会だより

第10回定例会報告

3月7日(金) 13時より会議室にて
(運営委員会より)

- 1) 新しい運営委員が各学年1人ずつ決まりました。(新7年生以外)
- 2) 保護者会室のコピー機を解約。
- 3) 学校から保護者宛てのプリント類が届いていない事があるので、確実に保護者に届く方法を検討中。

(今後の予定)

- 3月：各委員会は総会資料を作成し、書記へ渡す。
- 4月：臨時定例会として、総会資料のチェック及び新旧役員顔合わせ。
- 5月：総会

各委員会、各学年とも今年度の活動がほぼ終了し、1年を振り返っての反省や新年度への提案についての話し合いがありました。学校からのプリント類が確実に保護者に届く方法として、希望者に郵送、パソコンメール等を利用してはどうかとの意見が出ました。また予算の使い方の再確認や残った予算をどうするか、その他新年度での新しい活動についての提案などいろいろな意見の交換が行われました。

一年を振り返って

2002年度保護者会報告

運営委員長 井上正美

年度始めにお知らせしました3点の結果についてご報告します。

(1) 現状にあったシステムに見直す。以前は定例会に学年委員全員が出席していましたが、クラス数の増加により50数名での会議となり機能するのが難しい状態でした。今年度は各委員会の委員長 副委員長 学年代表 運営委員の24名としてみました。その結果、活発な議論が交わされ充実した会議となりました。

(2) できるだけたくさんの保護者の方に参加していただく。いままではコンサートなどの飲み物のサービス・APACの食事の提供など学校行事をサポートする活動をボランティア委員のみでお

こなっていましたが、今年度は委員が企画を立て保護者の方のボランティアを募って参加していただく形にしました。異なった学年の方々と知り合え、情報交換できる良い場となったのではないのでしょうか。また、たくさんの方のお手伝いや、美味しいお菓子の寄付をいただき大変ありがとうございました。

(3) 保護者の声を反映できるようにする。パイプ役として学年代表を新設しました。しかし、従来通り学年委員全員が仕事をする方がよりスムーズにいくという事になり今年度で廃止することになりました。

以上のように試行錯誤の1年間でしたが、温かく見守りご協力いただきまして本当にありがとうございました。のびのびと楽しく活動することができました。これからもよろしくお願いします。

運営委員会 黒田佳津子

あっという間に過ぎた1年でした。(平凡な言い方ですが、これ、痛感しています。)多くの人たちとお知り合いになれ、また、SISの委員の活動、OISとの関係なども十分に知ることができました。子供たちが毎日過ごしているこの学校が、学校へ足を運ぶことによって、又、定例会に出ることによって、親にとってさらに身近なものになることだと思いました。

この1年、さまざまな方面からサポートして下さった皆様、本当にありがとうございました。

フォーラム委員会 保城早苗

フォーラム委員になった当初、私達6人は全くの手探り状態でのスタートでした。お互い知らぬ者同士、期待と不安の入り混じった気持ちを抱えながら、何度もミーティングを重ねた第1回目の体験講座「能楽おもしろゼミナール」。参加して下さった方たち一人一人にお礼を言いたい気持ちでいっぱいになりました。第2回目の講習会「お正月飾りのクラフト」多くの方の

ご応募をいただき、充実した会になりました。この頃には、お互いの信頼感も生まれ楽しい委員会になってきました。第3回目の「タイ料理講習会」今までの経験と反省をもとに、少し余裕を持ちながら準備を進める事が出来ました。この1年は私達にとって、人と人との輪の広がりを感じることできる、とても充実したものになったと感謝しております。また、この1年の活動を支えてくださった先生方、職員の皆様、保護者の皆様、そして快く講師を引き受けて下さった保護者の皆様のご協力とご支援に、この場をお借りいたしまして心より感謝いたします。ありがとうございました。

ボランティア委員会 堂腰清美

千里国際学園にお世話になって7年目の'02年度 初めてSISの「ボランティア」を経験させて頂きました。近年(注：'02年度は除く)はあまり「ボランティア募集」のお便りを見る事が無かったのですが、卒業した長男が通い始めた頃は、しばしば「ボランティア募集」のお便りを頂いたような記憶があります。その頃は、遠距離通学(京都市より)であること、下の子が小さかった(2歳)ことを理由に、「ボランティアって何をするんだろう?」「私のように学校に不慣れで不器用な者が参加させていただいてもお邪魔になるだけだ」なんて勝手に考えて、全くお手伝いをさせていただくことなく過ごしてきました。

'02年度「ボランティア委員」をお引き受けする事になり、APACを始めとする学校の様々なイベントでティ・サービスや食事の用意を経験させて頂く機会を得ました。昨年度はイベントが多かった上にボランティア委員の人数が少なく、保護者の皆様からのボランティアを募らせていただいたのですが、本当に大勢の保護者の皆さんが、気軽にお手伝いに来てくださり、とても嬉しく思うとともに過去の自分のいい加減さを大いに反省したもので

した。

ボランティアのお仕事の内容は、子どもたちとそのお世話を下さる先生方の食事やスナック準備です。和気藹々とおしゃべりしながらの作業です。学年を越えたお母さんたちとおしゃべりは楽しくて、貴重なもの。お得意料理のこつを教えて頂いたり、学校や子どもたちの様々な情報を得たりすることができました。また昨年度は、私がイジイジ尻込みをしていた時代に当たる7年生のお母さんたちのご参加が多くて、本当に頭の下がる思いでした。

私と同様、興味があるけれどもちょっと不安でボランティアに手が上がらない保護者の皆さん。ボランティアはやってみると、楽しくて得るところいっぱい。その上感謝されるお得なもの。やれる範囲でやれるところだけやるのがボランティアですから、ぜひお気軽に参加していただいて、学校のため子どもたちの喜びのために、少しの時間を分けていただければと思います。委員をお引き受けして、本当によい体験をさせていただきました。ありがとうございました。

ネットワーク委員会

2月28日新旧地域リーダー懇親会（参加44名）を行いました。地域の人数が少なく新顔が欲しい、人数が多く、連絡や場所の確保が大変、できるだけ親睦がはかれるような工夫など、リーダーの皆様のご苦労がうかがえました。しかし縦の関係ができてよい、色々の情報源として活用、地域の親睦がはかれる等、当委員会が地域のネットワーク作りに役立っていることを直接リーダーから聞くことができ嬉しく思いました。

本年度の活動目標を①できるだけ多くの地域で親睦会を開いてもらい、会員相互の親睦に役立つ。②学校や運営委員会のパイプ役として親睦会が出た要望、意見を伝えるべきところに伝えるの2点におきました。②については随時インターカルチャーに御報告させていただきましたが①については地域

リーダーをはじめ多くの皆様のご協力のおかげで表のような活動結果をお伝えできますことを感謝いたします。

家庭数の計算では複数回親睦会をした地域では出席された家庭を一度だけ数えました。ご夫婦で出席された家庭も一家庭として扱いました。学年ごとの計算では兄弟も各在学年で家庭数の計算と同様に一生徒につき一度だけ数えました。（小数点以下四捨五入）夫婦で出席3、OIS1、卒業生保護者12、入学予定者保護者2、の参加がありましたことを付記させていただきます。

☆一年を振り返って各委員より一言☆

親睦会の報告書を読むと肯定的なものが多く、ネットワークの仕事への評価としてうれしく思います。（森阪）

千里国際学園のネットワークが今後でも発展していった欲しいです。（安藤）

この一年間地域のネットワークを通じて色々な方にお会いでき、色々とした楽しい一年でした。（角本）

学年を越えたつながりができてよかったです。皆さんもネットワーク委員をやってみてください。（瀧口）

皆様の協力を得て、楽しい仲間と仕事ができ充実した一年でした。（福井）

0ったり、0まか、0もしろい、0んならしい（！？）0型群団の今年のネットワーク委員会でした。「こんな委員会いらんちゃうの？」と言ってた4月から「なんたってネットワークよ！！！」と言うまで進化させていただきました。お会いできた多くの方々、また、直接は知らなくてもご協力くださったもっと多くの皆様、ありがとうございました。（リース）

広報委員会

今年度の広報は、例年の委員会活動に加えて、生徒・保護者共々最も関心あるであろう（？）大学に焦点をあて「シリーズ『大学』ってどんなところ？」と称して掲載してまいりました。第一回の立命館大学の巻に始まり、今回の外国語大学の巻まで、インタビューにご協力いただいた卒業生のみなさんに改めて感謝します。毎回どの方も心のこもった説得力のある回答で思い上がったところもなく、希望をもって生活しておられ、自分の子供で

あるかのように誇らしく思ったものです。みなさんもそう感じられたのではないのでしょうか？このシリーズにあたり、池田先生、並びに栗原先生にお世話になりました。有り難うございました。

私達広報も各々家庭の事情・仕事等多忙の中での活動でしたが、メンバー同志のあたたかいフォローと文明の利器PCのおかげで、一年間やりとげることができたと思います。ご苦労様でした。そして、そして、最後になりましたが、毎回編集して下さっている馬場先生、大変お世話になり有り難うございました。

7年生学年代表 岩本つこ

期待と不安で迎えた7年生も、驚くべき早さで過ぎてしまいました。保護者の交流を深めるために催しました保護者親睦会にも多数御参加頂きました。又、インターナショナルフェアに於いては沢山の方の御協力を得て、お父様方の参加も多く、和気藹々と楽しい時間を持てた事をとて意義深く嬉しく思いました。7年生のこの「一致団結」のパワーを8年生に繋げればと思います。何も判らず、お引き受けしました役員でしたが、皆様のおかげで無事終わりました事を感謝致します。本当にありがとうございました。

8年生学年代表 浅芝安里

2月19日、第3回親睦会を開きました。今回は梅田のホテルにて昼食をとりながらの会合としました。クラスの枠をこえた歓談のひとつとなりました。この日を含めて合計3回の親睦会（6月、10月、2月）を開きました。何かと難しい年齢といわれる8学年の子どもたちについて、担任の先生方、栗原先生、そして校長先生にいろいろお話をうかがいました。普段、学校での子どもたちの様子がわからない保護者たちにとって、こうした会合は良い機会であるという声が出ていました。また、これは8学年に限ったことではないのですが、生徒をととしての学校からの各家庭への配布物が保護者に届きにくいという現状があります。そのため、保護者会関係のお知らせはたいてい電話またはファックスを使っていますが、全ての家庭にはやく、また正

（次ページ★に続く）

活動結果

親睦会開催地区		96%						
家庭数		7年	8年	9年	10年	11年	12年	
S区		385	54	70	55	81	65	83
親睦会								
出席数		237	39	46	31	54	45	38
出席率%		62	72	66	56	67	69	46

シリーズ「大学」ってどんなところ？

第6回外国語大学の巻

■I.A.さん 神戸市外国語大学イスパニア学科2回生

Q. 志望理由は？

A. 私がこの大学を選んだ理由は、今まで慣れ親しんだ英語以外の語学を学んでみたかったからです。特定の言語を選ばず、英語以外で興味が持てた言語がある関西の私立・国立・公立の大学を範囲に受験し、合格した大学の中から一番興味が持てたこのイスパニア学科にしました。

Q. 受験方法は？また勉強法は？

A. 受験方法は、一般試験の前期を受けました。他の私立は公募制推薦で受けて1校をキープしていました。前期試験の内容は英語の和訳や英作文など、科目は英語のみだったので、少し安心していたのですが、センター試験

が1番の難題だったので、高2になる直前の春休みから、少人数制の予備校に通ったことは、先生の日も行き届いたので良かったと思います。特に英語は、予備校に入ってから、千里国際の授業で使う英語だけでは受験の英語試験に乗り切れないと解ったので助かりました。資格として英検準1級を持っていましたが、公募制推薦の書類にしか生かせる機会がありませんでした。

Q. 大学生活は？

A. 大学生活には満足しています。周りの人達が真面目で勉強家が多いので、のんびりしている私にとって、良い刺激になっています。勉強してないと語学はすぐ差がひらくので怖いところもありますが、大学自体は千里国際より生徒数が少し多いぐらいの規模なので落ち着く環境です。日本の様々な

地方から来ている人達で一杯なので、地方の話などで盛り上がりたりと、とても面白いです。ただ、外国語大学なのに、外国人留学生を見かけないので、校内に外国の方がいると周りがざわめくのは、どうかとも思います。

Q. 在学中の資格取得については？

A. 現在、部活もアルバイトもしていない状況なので、2回生になってから通関士やパソコンの資格を取るためのスクールに通おうかと考えています。この大学は、英会話を授業でする機会が、ものすごく少ないので英会話の学校に通うことも考えています。就職活動中の先輩などの話を聞いて、早いうちに資格を取ろうとしている人達が多いです。

Q. 将来、目指している職業は？

A. 将来については、まだ模索中で

(前ページ★の続き)

確に伝えるという点に関し問題があります。伝える側としては、各家庭で生徒から保護者にスムーズに配布物が渡されていけば済むことなのに、と思わずにはいられません。今後、改善していかなくてはならない問題ではないでしょうか。

9年生学年代表 信原洋子

月並みですが、「あっ」と言う間に過ぎた一年間でした。委員を経験してみても、様々な行事に多くの保護者の方が、快くお手伝いを引き受けて下さる姿に接して、あらためてお手伝いの方の「ありがたさ」を感じました。3月11日の「謝恩会」におきましても保護者会、お手伝い下さった他学年の保護者の皆様、9年生の保護者の皆様のお力により和やかなうちに無事終えることができました。色々な方に支えられ、無事に委員を終えることができましたこと、感謝申し上げます。

10年生学年代表 柴田映子

6月と10月に学年の懇親会、マーボー丼と黒真珠ドリンクの試食・試飲会、インターナショナルフェアへの出店と進路説明会、そして最後は3月にお父さん方にも参加して頂いた日曜

夜の懇親会。最初はどうしようか？何をしようか？と不安ばかりでしたが、保護者の皆様、先生方、学年委員の方々のご協力でどうにか無事に終了することができました。保護者の皆様には、学校やインターナショナルフェアへのボランティア参加で多大なご協力を頂き誠に有難うございました。今回、委員をやらせて頂いたことで多くの保護者の方々や委員の皆様とつながりがもてたことを嬉しく思います。また、子供が高校生にもなると、なかなか学校に足を運ぶことが少なくなりがちですが、今回はいろいろな行事に参加でき、学校の1年が理解できた様な気がします。本当に貴重な経験をさせてもらったと思います。今後も学校やPTAの行事に出来るだけ参加していこうと思います。本当に1年間で有難うございました。

11年生学年代表 植村仁美

11年生保護者会は、5月30日親睦会、6月20日進路説明会、10月10日及び11月14日インターナショナルフェアのクラフト作り、2月26日フラワーアレンジメントと、5回の学年懇親会をしました。どの会にもたくさんの方々の

ご参加をいただき、有り難うございました。学年途中での転入の方もいらっしゃる、皆様が参加していただけるように配慮したつもりでしたが、至らない点はお許し下さい。

11年生の悲しい思い出として忘れることのできないことは、9月5日に長谷彩さんが亡くなられたことです。本当に悲しいことでした。長谷さんが友達にいつまでも家に寄って欲しいといわれ、子供達は時々お邪魔しています。彩さんはずっと子供達の心の中に生きていくことでしょう。

12年生学年代表 堀 教子

子供達の卒業と共に、私達も保護者会を卒業です。沢山の出会いや情報交換、etc... 保護者会を通じて得たものは、私達にとって大切なものとなりました。

これまでの皆様のご協力に感謝いたしますと共に、これからのご活躍をお祈りしております。何かお手伝いできることがあれば、いつでも声を掛けて下さいね。待っています。

先生方、学校関係者の方々、保護者の皆様、そして子供たち、本当に有難うございました。

す。外国語を習っているから、外国語の専門職、と言う風に偏らずに、在学中に色々な経験をして視野を広げてから、なりた職業を決めるつもりです。

Q. ストレス解消法は？

A. 音楽を聴いたり、おいしい物を食べたり、友達と遊んだりしてストレス解消しています。

在校生に一言

自分の将来に沿って大学を選ぶ人も多いと思いますが、特にこれと今決まっていな人は、自分の興味のあるもので大学を選ぶ手もあるので、あまり、大学＝自分の将来の職業、と思わなくてもいいと思います。私が大学を選ぶ時、周りの友達が自分の夢へのステップとして大学を選んでいて、自分にはそのような目標がなかったの、少し焦ったりもしました。特に目的もなく、ただ大学に入るのは否定的なイメージが私にはあったので。でも、大学に入ってから自分のやりたいことを見つけることは、決して恥ずかしいことじゃないと思うので、もし迷っている人は、この手も選択の一つに加えてみることをお勧めします。あと、私が後悔していることなのですが、S I S にいる時に偏った授業の取り方をせず

に、文系も理系もバランスよく取った方が視野が広がるので、理数が苦手だからといって、数学や化学を避けない方がプラスになると思います。数学を避けてきた私は、今、苦労しています。

大学に入学して感じたこと

大学に入って驚いたことは、かなり多くの人が高校の間に海外留学をしていたことです。中学も高校も千里国際にいた私は、他の学校でそんなに留学を経験している人達がいるとは思いませんでした。千里国際で毎日英語に触れ合っていたから、外国語大学では、他校から来た人よりも有利になるのかと言えば、そんなことはないです。むしろ、帰国子女の私よりも高校で1年間留学していた人の方が英語がうまい！

■N.Y.さん 関西外国語大学国際言語学部国際言語コミュニケーション学科4回生
ビジネスコミュニケーション専攻（他にドイツ語フランス語中国語専攻があります）

Q. 志望理由は？

A. 私は高校の時は、色々な職業につきたいと考えていました。例えば、日本語教員、通訳、ツアーコンダクター、フライトアテンダント、保育士

などです。そこで、自分のなりた職業に共通して必要なものは何かと考えた結果、これからは語学が必要だと考え、関西外大に行く事に決めました。そして、日本語教員の養成過程があったのも志望した理由の一つです。生徒数が少ない事と外国の人と接する機会が多いこと（実際はそうでもない）も理由に挙げられます。

Q. 勉強法、また受験資格は？

A. 私は、指定校推薦で入学しました。内容は書類と簡単な面接だけででした。資格は、英検と国連英検をもっていました。受験には直接関係なかったように思います。指定校を考える前までは、一般入試で入る事を考えていたので塾（予備校）にも、一応通っていました。

Q. 大学生活はどうですか？

A. 今は、自分の大学生活にとっても満足しています。関西外大の国際言語コミュニケーション学科は、とてもSISと似ているところがあり、とても大学とは思わせられないような雰囲気です。クラスも一クラス30人程度で、少ない授業だと、5人程度のときもあります。クラスの中でも、生徒が発言する場が多く、SISと同じように参加型の授業がほとんどです。よって、成績もほかの大学のようにテストのみで決められることなく、授業の参加態度や、出席点、レポートなど色々な面から評価されます。1・2回生はとても過密スケジュール（人にもよる）でしたが、授業が楽しいため、片道2時間の通学時間も苦になりませんでした。しかし、思ったよりも英語の授業が少なかったことと学内にいる外国の生徒と先生の数がすくなかったことから、英会話スクールには一回生から通っています。部活にも所属しています。文化系なので、部活に時間を取られる事はほとんどありません。アルバイトは、USJと梅田の映画館でしています。アルバイトもとても楽しんでいます。厳しい面もありますが、将来社会に出て行くための一経験として、自分の成長へつなげたいと考えています。

Q. 将来目指している職業は？

A. この三年間色々と考えた結果将来は航空関係の仕事につきたいと考えています。今、ちょうど就職活動の時期

総会のお知らせ

2003年総会を下記のとおり、開催します。必ずご出席ください。

日時： 5月20日（火） 1時より

場所： シアター

やむを得ずご欠席される場合は、委任状を下記の場合へご提出ください。

締切日： 5月15日（木）

場所： インフォメーションセンター横、
保護者会ボックス

よろしくお願いします。

にあり、この仕事は厳しい門であるため、一般企業も受けています。将来的にはボランティアとして、日本語教員をしたいと思っています。

Q. 好きな事(ストレス解消法)は何ですか？

A. 通学時間を利用して、読書をしています。不思議な事に高校時代好きでなかった事も、環境が変わると好きになってしまうこともあるのですね。あとは、おいしいものを食べに行く事です。ストレスがたまるとついつい、行っちゃえてってなってしまう。

在校生に一言

在校生の方、受験、頑張ってくださいね。もし、行くところがなければ関西外大へ来てください。もし自分の思い通りに行かなくても、大学へ入ってから自分で変えて行けばいいと思います。大学を選ぶより、大学で何がしたいか考えてくださいね。でも、SISでできないことを思いっきり楽しんでくださいね。もし何か聞きたいことがあればいつでも聞いてくださいね。SISの頃には教育環境の良さはとても感じました。私は、もともと一般生だったこともあってか、周りの友達とも馴染めましたし、雰囲気にも比較的早く馴染むことが出来ました。大学では同じものを目指している友達が多いので、より仲良くなります。

正直言って、英語力はSISでは、おちこぼれでしたが(笑)大学へ入って他の生徒達と比べてみると、優れていました。高校の時に色々な経験をさせてもらったことはいつも友達に自慢し、羨ましがられています。やっぱり、SISで出来た友達は一生の宝物です。何かあるとすぐにメールや電話で連絡してしまいます。少なくとも半年に一回はみんなであって、昔の話で盛り上がっています。そして、同じ経験をもつものにしか分からないこともあって、よく相談にものってもらっています。本当にいろいろなものをSISでは得ることが出来ました。

■O.M.さん 大阪外国語大学地域文化学部ポルトガル学科1年生

Q. 志望理由は？

A. 3カ国目が話せるようになりたかった。将来、やりたい職業のために、外国語をしっかり身につけられる

大学に入りたかったから。

Q. 受験方法は？資格は何か持っていましたか？

A. 一般入試(センター試験と2次試験)(小論文、英語)英検2級までしか持っていなかった。

Q. 勉強法は？

A. 夏期講習から予備校に通いだしたのと、通信教育を高2の終わりから始めた。あと、センター試験までは、各教科個別に、放課後、学校の先生にみてもらっていたのと、2次試験対策もセンター試験後から個別でみてもらっていた。

Q. 大学生活での抱負、目標はありますか？

A. 在学中に英語の力(TOEFUL、英検、通検)は、伸ばしておきたいと思っている。バイトはSISのJFKのSaturday Schoolをします。

Q. 将来、目指している職業は？

A. 語学とスポーツ両方に関連する職業。スポーツ会社や、大会運営などの場で通訳など語学を生かしたポジションで働きたい。

Q. ストレス解消法は？

A. 運動、友達に会う。

Q. 在校生に一言

A. 受験勉強、精神的におかしくなりそうな時もあるけど、「この時期を乗り越えて、ハッピーな結果を得るんだ！」と信じて、頑張れ！

Q. S I S 卒業生で良かったと実感したことはありますか？

A. ものすごくある。普通の学校に行っていたら、今、自分の持っている考え方とかできなかったと思う。海外に視野を向けている人も多いし、学校自体は小さいけど、考え方の広い学校だと思う。

卒業生アンケート参加者の感想

・お話を聞いて私も色々勉強させて頂き、とても良い機会だったと思います。

・お役に立てたようで大変光栄です。

・何かみなさんのお役に立てるような話しは出来ましたでしょうか？

・また何かと質問がありましたら、いつでも聞いてください。

・SISの役にたてるなら、できるだけ事はしたいと思いますので、また何か

あればお申し付けください。

・母校SISの後輩の為ならよろこんで協力させていただきます。更なる千里国際学園の生徒の飛躍にぜひ協力させていただきます。

・私のほうも、このアンケートがいろいろ考えるきっかけになりました。あとは、これが皆さんの参考になっていただけると嬉しいのですが。

・お役に立てることがあったら、声をかけて下さい。バシバシ使って下さい。

アンケート後記

ご覧のように、卒業生アンケート参加者の感想で、卒業生の皆さんの後輩にたいする温かい気持ちが本当に嬉しく思われます。

直接インタビューした大学生は、口々に、「自分たちの時にこういうのがあったら良かったのに…」といわれ、大変嬉しく思ったものです。大学生のみなさんは、それぞれ忙しい中、無理をしてでも書いていただける(生半可に書けない大作が多かったと私には、思えます。)このSISが、改めて、すごい学校だと思います。子供達の学校で良かったですね。

6回に渡り、アンケートにご協力いただいた卒業生の皆さん、有り難うございました。また、池田先生・栗原先生、そして、小野寺さんにもお世話になりました。本当に有り難うございました。

皆さんのおかげで、中身の濃い読み応えのあるシリーズ「大学ってどんなところ？」ができました。卒業生の原稿を読んでいると、興味深くてつい、「広報の仕事を忘れそう」と言う担当者もいました。すでに社会に出て各方面で活躍中の卒業生や大学で頑張っているすべての卒業生のいろいろな話を載せられたら、どんなに素敵だろうと思いますが…。このシリーズが、少しでも、皆さんのお役に立てたとすれば幸いです。

一年間、読んでいただきまして、有り難うございました。(A.N.)

5～6月行事予定

月 日 曜

- 5 15 木 春季リサイタル16:00
 21 水 第1回学校説明会13:30
 24 土 学園祭
 6 02 月 教員研修日生徒休校
 06 金 高等部スポーツ表彰式16:00
 10 火 高等部春季コンサート18:30
 13 金 OIS高等部卒業式19:00
 19 木 中等部春季コンサート16:00
 24 火 SIS編入選考
 30 月 春学期終了

学園祭

5月24日(土) 10:30-15:00

テーマ「タイムトラベル」

模擬店、バザー、野外ステージ等盛りだくさんです。周辺住民の方のご迷惑になりますので車でのご来校はご遠慮下さい。

編集後記

新入生とその保護者の皆さん、こんにちは。SIS広報センターは、インターカルチュアの編集・発行、学園ホームページの作成・更新をはじめ、「研究紀要」等の学園出版物の編集・発行の仕事をしています。井藤先生と2名だけの分掌ですが、教材研究やクラブ活動など忙しい中、頑張って次々と仕事をこなしています。インターカルチュアの「保護者会だより」のページは保護者会広報委員の方から記事を送っていただいています。前年度の委員の方のお仕事は今号で終わりですが、「シリーズ「大学」ってどんなところ？」は、大学の情報を知りたい生徒や保護者の方にとってとても参考になったと思います。ありがとうございました。(馬場博史)

雨と雪。寒い日ばかりがつづく3月が終わり、待ってました、の4月。春の到来。桜が咲き始めてからも雨の日が多かったけれど、その分晴れた日の桜の美しさが際立ち、また、風に流される桜吹雪も一段と美しく思えた春のはじまりでした。新しい季節、新しい顔、新しい仲間。一番好きな季節です。(井藤真由美)

インターカルチュアへの記事・ご感想等は、e-mailで hbaba@senri.ed.jp までお送り下さい。インターカルチュアはバックナンバーも含めて本学園ホームページ www.senri.ed.jp/interculture でもご覧いただけます。また学園ホームページにつきましてのご意見ご感想などは、webmaster-j@senri.ed.jp までお願いします。

編集：SIS広報センター 保護者会だより記事：保護者会広報委員 カット：イラストレーションクラブ生徒

Senri International School Foundation (SISF)

Senri International School (SIS)

Osaka International School (OIS)

4-4-16, Onohara-Nishi, Minoh-shi, Osaka 562-0032, JAPAN

TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055

学校法人千里国際学園(SISF)

千里国際学園中等部・高等部(SIS)

大阪インターナショナルスクール(OIS)

〒562-0032 大阪府箕面市小野原西4丁目4番16号

電話072-727-5050 FAX 072-727-5055

年間発行予定と主な内容 ()は発行時期

春学期5月号(上旬)卒業式、入学式、大学等合格状況

6月号(中旬)学園祭、教育実習

秋学期10月号(上旬)夏の宿泊行事、夏の諸活動報告

11月号(中旬)運動会、玄関コンサート

冬学期2月号(上旬)オールスクールプロダクション、模擬国連

3月号(中旬)入試結果、卒業生へ贈る言葉

他に留学報告、スポーツ結果、各種表彰、授業紹介、生徒会・クラブ活動等

千里国際学園は、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS) とを、同一敷地・校舎内に併設しています。

両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、APAC(Asia Pacific Activities Conference)の公式試合や、近隣のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生(日本の小学6年生～中学3年生春学期)をミドルスクール(MS)、9年生～12年生(日本の中学3年生秋学期～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。